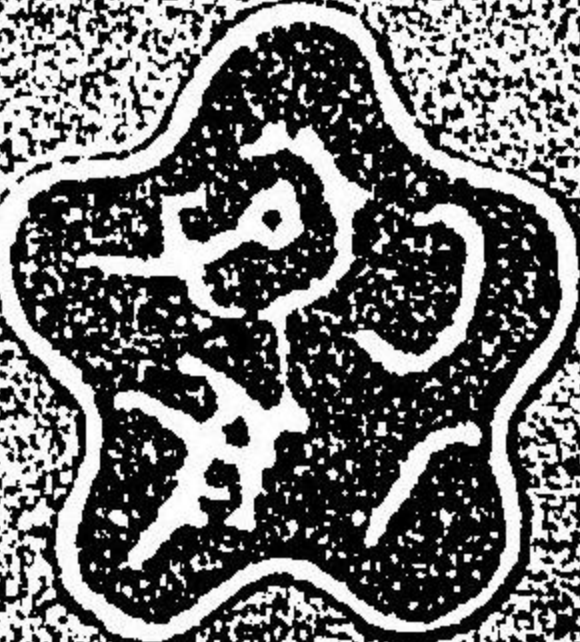


872

龍圖



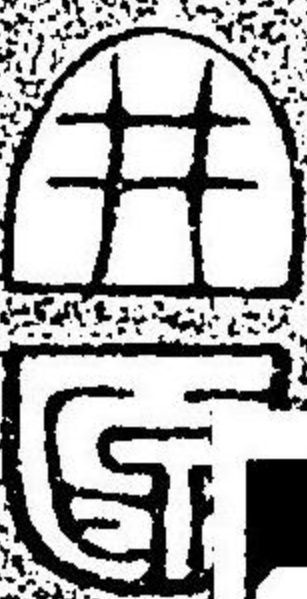
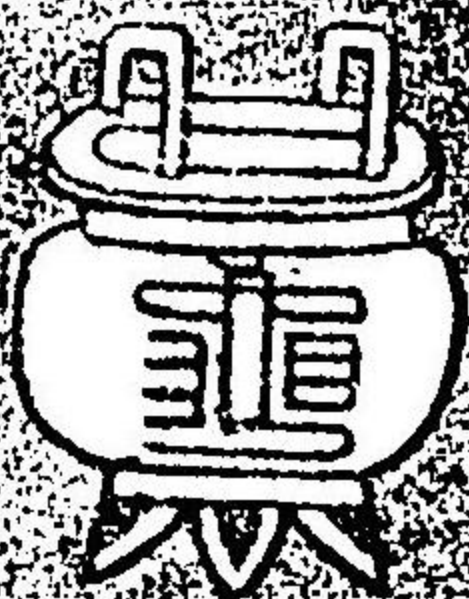
溫古小說



歲德五葉松

全

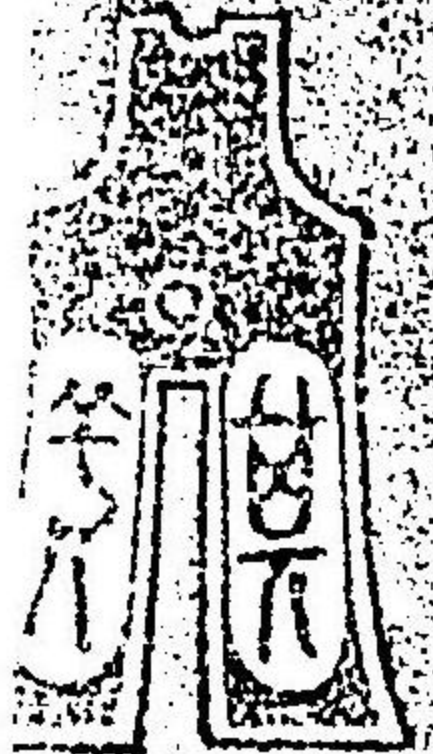
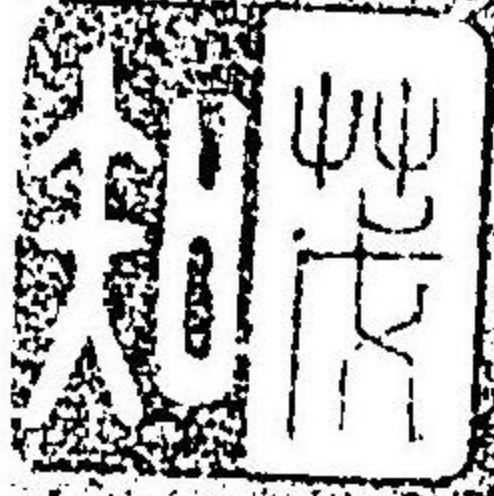
其積著
喘笑



9 E

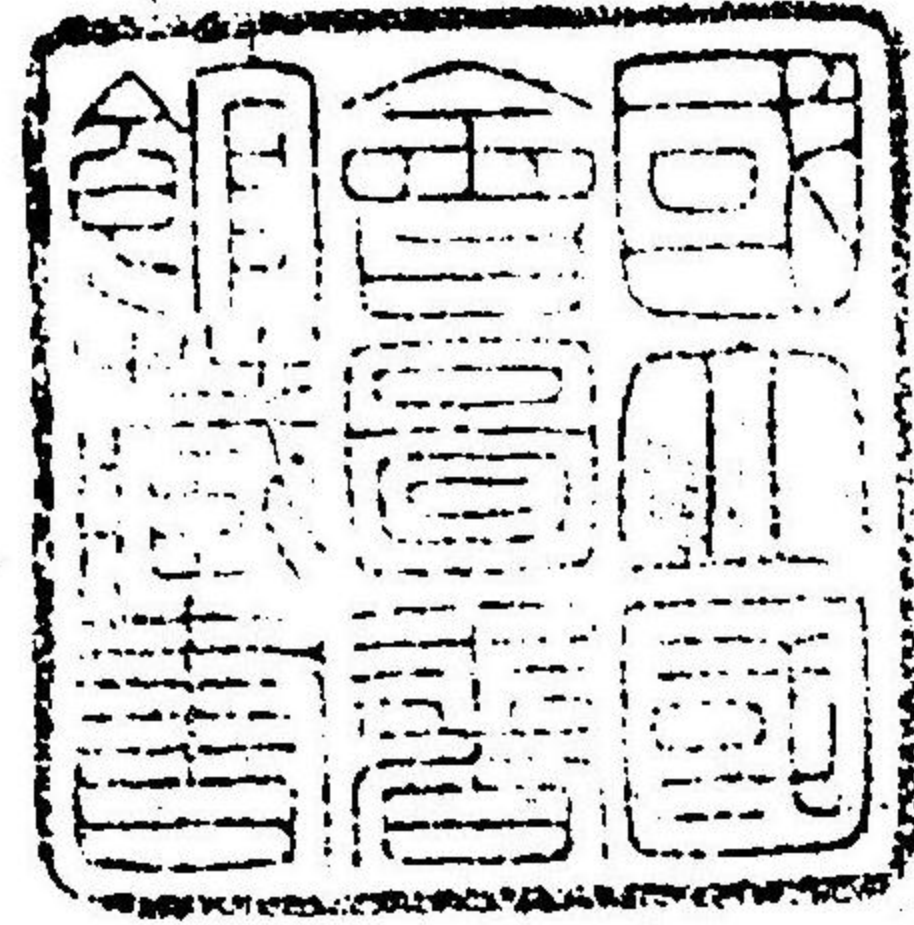


百歲



87-2

913.52 F98 t2



歲始孔沛
 欣慶方小
 而之先
 福中作
 我之富
 貴之福
 謠
 家之芳
 氣名之
 遠大思
 翁春
 駒自鞠
 欲之
 三三
 之四
 立奏
 不書
 乃
 每
 房
 大
 梅
 枝
 如
 勝
 之
 寫
 以
 之
 人



336884

仁義のよき合ふ千代とあはれ
 教乃若きひききりてくま
 始りし馬系とちよし種さる
 お本も鏝りて佳例延年の
 筆お奇なる色くもとど
 海手もくしやし
 たりふりひつる凡

瑞々 其々

義徳五葉松目錄

壹之卷 万歳の段

○野處女々々京の町の野處女よ三千兩

賣たる物は何々をまくりたくとぐりはまな思案大綱小綱のさかな酔に乗ず
 る家老の悪心

○勘太へ大夫新五郎十三郎へ才覺の役

たがひのせり合も長松原のこのはかくれもない勇力者三人無理を夕闇の出會
 の五郎四郎が難儀

○小判の箱の打わりたい又九郎が心

自分の慾に引かづみてのく金子のかたひ心どのえらぬぬけがけ底巧の深ひ海
 ばたの躁動敵を打寄る浪路

貳之卷 春駒の段

○是へ同それへ同同氣求たる身請

千兩の小判をだれかゝる山吹の瀬川ながれをたつる心中深ひ思慕のびんどは
ねたる海老蔵がよきぞ

○新四郎が立姿へ極印打た男立

わかひ八男のたて様がそよで内證聞おはすはきふしぎなるん引ばつてゐるわ

まがさ大盡の工夫

○年よし世よし出家の方便

計略にのつて来る春駒いさみにいさんでからくりのいと引上手すりかへた小

判の巧

三之卷

○やんらめぞたや、んら樂しや法眼か住居

あめかりさぶらふ姪がねらふ敵打わつていこれぬ又九郎が心のねく様にした

下町の伊見廻

○千両や萬両の褒美の約束

目

目前のかたさうつにうたれぬ詞の釘うらをかへしたる法眼がいさめにのりの
道の大佛壇

○懐飯の行衛死つまる敵役の錯

家賊を丸取にせうとのみ込すぎたかし木が寐間二度びつくりの三拾兩の小

判

四之卷

○大嶋臺の内氣な姫の玉琴

伊家老は伊家の福大こくむねにこえたる忠義の寶槌と鑿の相口成る法眼の働

○大黒に袋井とは相應の立

一にたはらふまへられての白狀二に悪まる巧のかすく三に三の仕合
四つよいきみな謀

○七つあがくの止宿ぎやく

ハッやるせな女房のなげき九ツことばに出しかねるさいご十で尋ひ所へ旅

五之卷 手毬歌の段

○ひるふみづ 火と成前表の敵

是ててうと百騎にあまる味方の武士もあされとてま法眼の姿出かぬる智慧の袋井が驚き

○いつむよ七や山伏の効験

手まりほどこづみのよし祈禱のゆりこみ場家鳴震動にこりはてし三浦左工門お思案の末

○はやり小歌の曲ハ曲者退治

こむよいくよい殿とよい姫さいつまでもかこらぬ手まりをまら米の筋目ハもさるけ家業昌

目録終

歳徳五葉松第壹卷

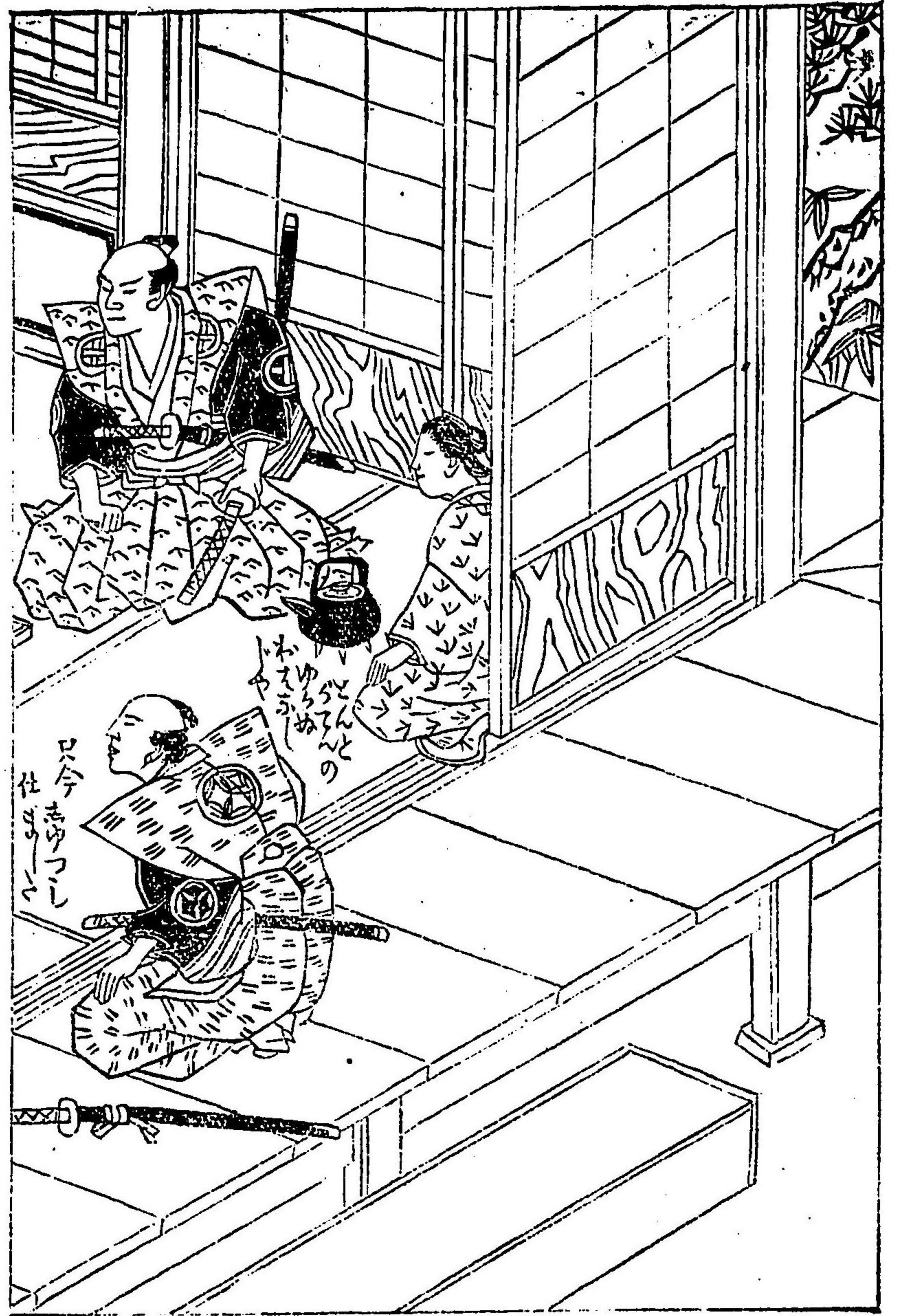
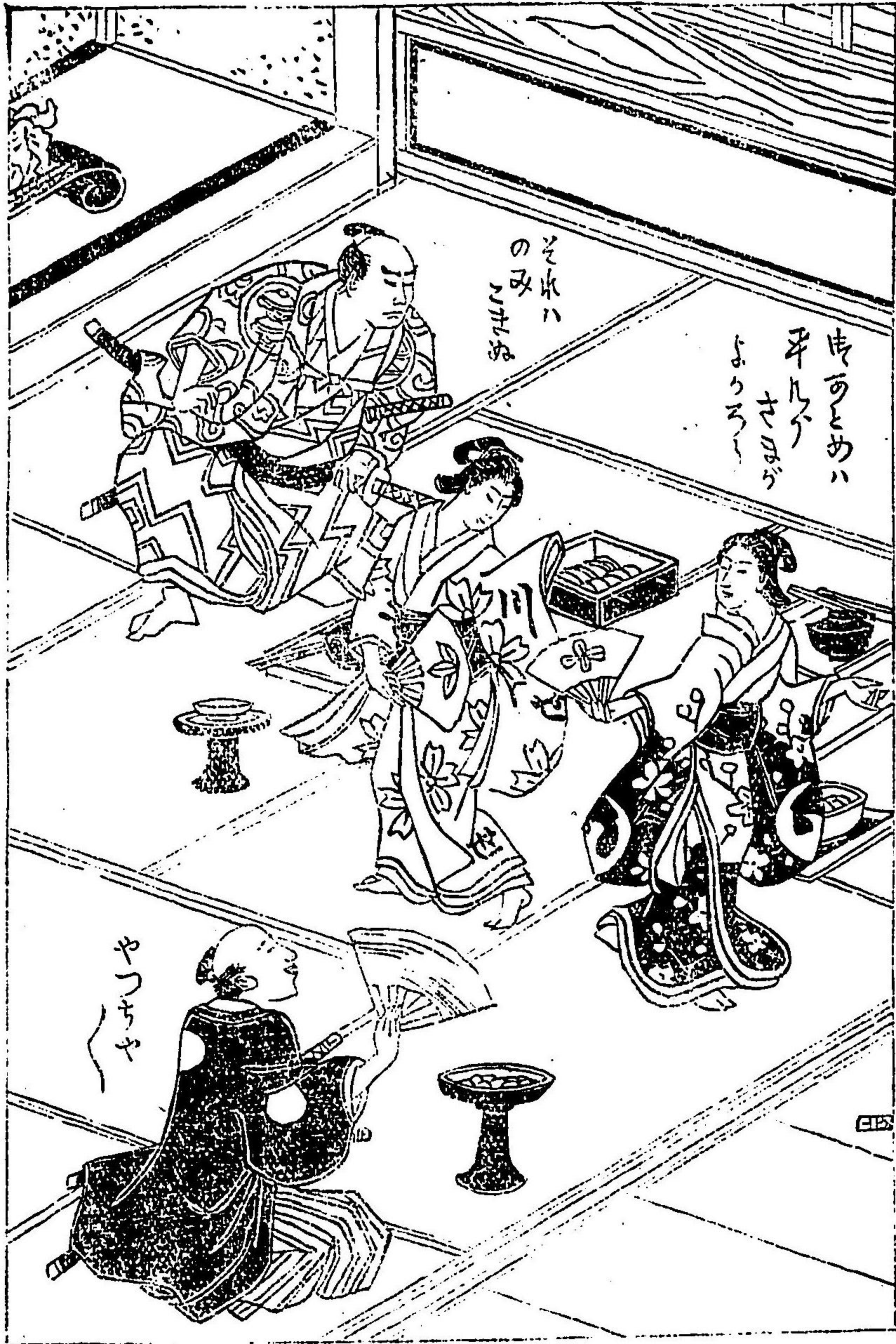
作者 其 瑞 笑

◎やまよめく京の町のやまよめに三千兩

徳若に御万歳と御代もさかへましく波靜なる時津風枝をならさぬろかの事具足積の鍵をさすれさし物棹にて釣をたれ軍といふはとつとむかしの茶のみ咄と成たる泰平の化治世の恵足利義政公の武徳なびかぬ草木も長門の國主大松左京大夫殿日か殿七三郎森興もろども在番として京詰の留主中は家老袋井三浦右工門城廓を預り主君に代りて國の政務を執り威風一人に歸しおそれぬ者もなかりけり惟歳寶徳二年ととし立かへる朝には木の芽もわかやぎ家中のめんくさへかへる春さかやき青陽の色をわらはし三浦右工門をわが國の一本の柱とわがまへ二本さしこしらし年始の御禮殿の御名代として三浦右工門さくらの間にてうくれば役から知行高先例にまかせ次第を立て儀式はれば三浦右工門も私宅へさかりに時のいきほひになりて家中大身小身の禮者門前に市をなしをのく退山の跡にのこるはいつもの相口同役龜山廣右工門原小平次用人濱松又九郎大納戸役石部段四郎なぞすくに居

なかれ上下ぬぎすてのしゑ着なから方々にてのゑたる屠蘇の上つり酔に高なしの世間はな
 し八重桐流の馬の乗方金川二左工門指南せられし二引流の劍術も小左工門儀左工門はて、
 よりつかひ手なしといへば一方より半三郎のその嫡傳にたゞわらひつつかはるゝが故
 に左の形でござるなどし武藝の取沙汰の跡は七五郎方のこしもとは何れもはるといへば
 助五郎所のうばによく似中たその娘この後家の贈前の品川藤十郎川崎甚左工門京詰に
 て契情ぐるひに長せし咄まで取の内にいつも出いる舞子二三人和都といふ座頭が年禮に
 さたるを引とめこしもと針妙が酌にもたれかゝりたる小歌の辰己あがり無禮講もかくやと
 見ゆる中にも亭主三浦右工門とすき間を見あてせ同役廣右工門小平次をちかづけさしや
 さけるの大殿御在番いづれも御存の通七十にあまり給へば餘命なきにさはまり先御臺なく
 ならせられてよりわか殿七三郎殿わがまゝにそだしれなにとも心もとなき身もちまかるに
 當てたい島田御前の弟御桑名平九郎様何とぞ此家國ををれさめんとの如望み手前共をこじ
 め者々一味連判何とぞと時節どうかゞふ所に若殿七三郎殿色あふけり酒あみだれ都六條三
 筋町の契精瀬川にふかくなづみだんくの不行跡かさなり大殿御さげんあしくさんくの
 仕合を是をさいしいに平九郎様ならびに拙者倅京都へつめ居やす同苗大五郎など若殿のわ
 るひ事かぞへたして大殿のね耳へいれしゆへ若殿御勘當のよし倅方より申來れりまかれは
 かねて一味連判いたし置し通に當みだいの弟御平九郎様を御家督にたて申時節到來といふ
 物何とめでたい事ではござらぬかといへばいづれも小聲にて年の始に悦しき事をうけ給は
 りたり御家中はのこらず血判させをきたれば氣遣ひさらになまそれにつき若殿七三郎殿へ
 の櫻山三位殿のゆ娘花づま姫を申入らるゝ結納まで事すみたり此花妻姫と申はかくれもな
 き美人と平九郎様見ぬ戀にわかれかねて若殿をはいまくりたる跡にでい此花づま姫を平
 九郎様よびむかへて奥儀にせんとの御心なれば此度を幸に三浦右備門殿御子息大五郎殿
 へ御相談ありしかば大五郎殿申さるゝいわか殿七三郎殿存生と有ては中々花づま様心中
 だてして平九郎様へよめ入はなされますその上さくら山三位殿の執權には神原海老藏と申
 て事むつかしき男あれば何とぞ一刻もとやくわか殿をころして仕廻ふ工夫こそと色々思案
 の上大五郎を大懸に仕たて若殿のふかくなづまれし契情瀬川を請出し大五郎殿わたく方どさ
 だ宛なば色に引され文通有べしそこをあさへてぬしある女に文のとりかはしとは不義にさ
 しまつたりとくびをいねるに中分となひ管是によりて右の瀬川を請出す金子三千兩に才
 賢してさしのばすべきよし舊冬にし詰て申來り御代官赤坂五郎四郎へ申渡し南御領地の内

なかれ上下ぬぎすてのしゑ着なから方々にてのゑたる屠蘇の上つり酔に高なしの世間はな
 し八重桐流の馬の乗方金川二左工門指南せられし二引流の劍術も小左工門儀左工門はて、
 よりつかひ手なしといへば一方より半三郎のその嫡傳にたゞわらひつつかはるゝが故
 に左の形でござるなどし武藝の取沙汰の跡は七五郎方のこしもとは何れもはるといへば
 助五郎所のうばによく似中たその娘この後家の贈前の品川藤十郎川崎甚左工門京詰に
 て契情ぐるひに長せし咄まで取の内にいつも出いる舞子二三人和都といふ座頭が年禮に
 さたるを引とめこしもと針妙が酌にもたれかゝりたる小歌の辰己あがり無禮講もかくやと
 見ゆる中にも亭主三浦右工門とすき間を見あてせ同役廣右工門小平次をちかづけさしや
 さけるの大殿御在番いづれも御存の通七十にあまり給へば餘命なきにさはまり先御臺なく
 ならせられてよりわか殿七三郎殿わがまゝにそだしれなにとも心もとなき身もちまかるに
 當てたい島田御前の弟御桑名平九郎様何とぞ此家國ををれさめんとの如望み手前共をこじ
 め者々一味連判何とぞと時節どうかゞふ所に若殿七三郎殿色あふけり酒あみだれ都六條三
 筋町の契精瀬川にふかくなづみだんくの不行跡かさなり大殿御さげんあしくさんくの
 仕合を是をさいしいに平九郎様ならびに拙者倅京都へつめ居やす同苗大五郎など若殿のわ
 るひ事かぞへたして大殿のね耳へいれしゆへ若殿御勘當のよし倅方より申來れりまかれは
 かねて一味連判いたし置し通に當みだいの弟御平九郎様を御家督にたて申時節到來といふ
 物何とめでたい事ではござらぬかといへばいづれも小聲にて年の始に悦しき事をうけ給は
 りたり御家中はのこらず血判させをきたれば氣遣ひさらになまそれにつき若殿七三郎殿へ
 の櫻山三位殿のゆ娘花づま姫を申入らるゝ結納まで事すみたり此花妻姫と申はかくれもな
 き美人と平九郎様見ぬ戀にわかれかねて若殿をはいまくりたる跡にでい此花づま姫を平
 九郎様よびむかへて奥儀にせんとの御心なれば此度を幸に三浦右備門殿御子息大五郎殿
 へ御相談ありしかば大五郎殿申さるゝいわか殿七三郎殿存生と有ては中々花づま様心中
 だてして平九郎様へよめ入はなされますその上さくら山三位殿の執權には神原海老藏と申
 て事むつかしき男あれば何とぞ一刻もとやくわか殿をころして仕廻ふ工夫こそと色々思案
 の上大五郎を大懸に仕たて若殿のふかくなづまれし契情瀬川を請出し大五郎殿わたく方どさ
 だ宛なば色に引され文通有べしそこをあさへてぬしある女に文のとりかはしとは不義にさ
 しまつたりとくびをいねるに中分となひ管是によりて右の瀬川を請出す金子三千兩に才
 賢してさしのばすべきよし舊冬にし詰て申來り御代官赤坂五郎四郎へ申渡し南御領地の内



にて才覺致し申儀にと申ふくめ候へば大方今明日にはどこのへ歸るでござらうと三人寄ば
 三本の柱ども成べき家老中の密談用人納戸役も異儀なく何れも口と耳とのより合にて外へ
 もれねば其間ひいてゐる座頭がさみせんすが、きのつてんどよめざる座頭なれ共其あとは
 道行やられざるやら紛かすその春心舞子座頭もれいと申せて立歸るまた寒の残りし正月さ
 むさつよければ酒のかんはつたりと直させはまぐりの吸物雉のやき鳥大鯛の蒸籠羹鴨雜煮
 は國風の正月夜食さいたれさへたれつと其間半分は酒が物いとす最中次の間よりわかどう
 共手をつかへて若殿様の御近習頭として御上京なされし四日市勘太郎様ひそかに貫島得た
 きよしにて下りふんどみのすそばをめしながら只兩人の御供廻りあてたゞ今れ立關まで
 靴出いかしいたしませうといへば亭主三浦右工門ひたいにしわよせ何と廣右殿思ひよらぬ
 勘太郎が下向あふも大事あはぬも大事何といたした物でござらうさといへば廣右工門ッ、
 ンこりや靴のひなされずば成まひなせと申にわざ／＼下りたる物ならばたとへ三日四日ま
 つてもおれにがしらすと歸るまいさいわゆる手前共も居合す所をよくござるべいさいかさま
 いづれにもあひ申さずばなるまじそれこなたへと申にぞ取次の考案内して四日市勘太郎編
 繩子の踏込もへぎ羅紗の馬のも羽取り大小の柄ぶくろ次の間あてはづしふすまのこなたよ
 りうか／＼へい三浦右工門ことばをかけ是は／＼勘太遠方太儀でござる餘塞もつよきに道中
 さぞ難儀免されつらんまかるに旅がけのまゝにて來られしとよく／＼の急用と存るまてわ
 ざ／＼下られしはいか様の儀といへば一座を見廻しいづれも遠慮仕るべき様これなら方
 と勘太郎いんぎんに若殿七三郎様さの御不行跡と申程の事とこれなけれ共申てもふとし
 わかにもござり少々さがよひなされしをたればとか仰山に申なし大殿様の御耳にも達し
 御勘氣どの御事申さばたつたれひとりの日か殿ひつきやう常分のこらしめのためどの存奉
 れども御供なくていかゞとすなはちわたくし御供申上たさむねねがひましてござれば御
 自分様の御子息大五郎殿にさしづにて一人にても御供のかなはぬにせして御供いたすものあ
 らば若殿の御爲に成まじさとの事ゆへちから及ばずかけながら心ぞへ申上るまでにていた
 はり申所に此たび若殿様金三千兩なければ品により日かきた心のはやまりにては御命にも
 か／＼りそなた事かござるによりまして京都でさま／＼才覺致して見せして若殿様日陰
 の御身と申すにさしつかへサア出ぬといふてから出ぬ物は棒をかまへて狗をよぶと勘當せ
 られてゐるむすこの借たがる金にて拙者了簡にもつきはて各様へひそかに御相談にまか
 り下りぬすこしばかりの契情事なき習でもござりませねばわが氣の段はとんどのけて

りうか／＼へい三浦右工門ことばをかけ是は／＼勘太遠方太儀でござる餘塞もつよきに道中
 さぞ難儀免されつらんまかるに旅がけのまゝにて來られしとよく／＼の急用と存るまてわ
 ざ／＼下られしはいか様の儀といへば一座を見廻しいづれも遠慮仕るべき様これなら方
 と勘太郎いんぎんに若殿七三郎様さの御不行跡と申程の事とこれなけれ共申てもふとし
 わかにもござり少々さがよひなされしをたればとか仰山に申なし大殿様の御耳にも達し
 御勘氣どの御事申さばたつたれひとりの日か殿ひつきやう常分のこらしめのためどの存奉
 れども御供なくていかゞとすなはちわたくし御供申上たさむねねがひましてござれば御
 自分様の御子息大五郎殿にさしづにて一人にても御供のかなはぬにせして御供いたすものあ
 らば若殿の御爲に成まじさとの事ゆへちから及ばずかけながら心ぞへ申上るまでにていた
 はり申所に此たび若殿様金三千兩なければ品により日かきた心のはやまりにては御命にも
 か／＼りそなた事かござるによりまして京都でさま／＼才覺致して見せして若殿様日陰
 の御身と申すにさしつかへサア出ぬといふてから出ぬ物は棒をかまへて狗をよぶと勘當せ
 られてゐるむすこの借たがる金にて拙者了簡にもつきはて各様へひそかに御相談にまか
 り下りぬすこしばかりの契情事なき習でもござりませねばわが氣の段はとんどのけて

急なる御用金三千兩れとのへなされ伊難儀をぬすくひなされて上られて下されませい申ても大松家のわか殿わづかの金子にさじつかへもしもの事がござつていかへらぬ儀ひとへに伊工夫願ひ奉ると涙をうかへての口上に若殿思ひの忠義顔色に見てこそみへにける

◎勘太郎の大夫新五郎十三の才わか役

三才岡繪を按ずるに南尼瓦羅といふ國は牛糞を愛して佛陀の前にも是を炷どかや惡に染たる者は忠臣の語を忌嫌ひ佞姦の詞を愛すされば家老袋井三甫右衛門相役龜山廣右衛門原小平次用人濱松又九郎大納戸石部段四郎を始四日市勘太郎が口上をせしら笑ひ中にも濱松又九郎すしと出て大殿京詰の内にこなたは若殿金子の用で罷國へ下るといふて下られしかよもやその願ひいたつまじ何と申立て下られしぞとくはれ勘太郎はさればその事でござる御國へと申儀は相かなふまじきと存伊勢參宮とつひりまかり下りたるといひせもはてす小平次ひざ立直しッアばかものいかにとし日かなればとてかやうに伊家老三人御用人も列座の所で上をなつはりて下りしとの白狀のらもの若殿につとめしゆへ武家の大法をもわすれ若殿さどがよひとは何の事だ契情賣婦を買にゆきめされたといはすいなことばづかひ能なし穴の狐さよろしくまた眼つき聞たくないとといふに勘太郎こらへかねしか共いや大

切の所ともねれしつづめさあそのいせ參宮といつはりまかり下りしがあやまりともならばその段はいか様共罪咎に仰付らるべしいさしかも恨に存じますまは若殿様の御用金の儀さへとしのへば本望に存奉らんといふを廣右工門目をむき出しやこもなはなつたらしめつゝ、ンこはつ乱心したそなたも大小もきわめて罷國さかぬよりばつばらひめされ心得ましたと又九郎段四郎左右より取てかゝるを勘太郎とびしさりよらばきらんずるまなごさしにさすがの手ねぢして見あひす内勘太郎打うなづき、大かた筋がまれた扱ひ日か殿をなき物にして筋目もなき思ひもよらぬ人を罷國の守にせんこりやをのく性根が人かはつたの今爰で仕様もあれども若殿様ゆせんとを見とゞけねばならぬ此勘太郎が一命さあまかり歸る後日のあたとも思えれば討とむる心はないかとあくまで廣言して立出れば運判所でない死物狂ひの相手になるものとないつづれも興へ入る内に勘太郎は立廻を罷り門外へ出ければ堀の上より三甫右工門廣右工門によつと出てこりや、勘太郎その方上をかすめ詐りてお國へ下りし段さつそく大五郎方まで中のばせは京都にての奉公も叶べからずすすれば不便や天然浪人でもかぶつて袖乞に成たらば親代々のなじめだけじや手のうちでもくれんど惡口して内へ入るを表にまちかけたる勘太郎が若黨小田原新五郎草履取の重三郎大

さにてせいで中にも頼五郎子細をどへは勘太郎次第つぶさにかたるを聞て草履取重三郎を
 を堪忍なざる、といふ事がござるかひなくくび引ぬいて参らせんとかけいらんとするを
 若黨新五郎はさへてはやまるまひ、はやまつてはなふ、事を仕そんするもと成りや
 わかひものにつくりと氣をしづめてきけ旦那にて大切の御用京都へひとまづ御歸りなされ
 若殿七三郎様へ此様子を仰上らるゝまですこしでも事が出来ては忠がかへつて不忠になる
 理、のためにならぬぞしづまれといへどもそれでもさせん旦那を乞食とぬかしたその
 ちうげたをハテわるひ御了簡もろこし齊の國の臣下李婆といふものあり楚の國へ使にゆき
 たる所に楚玉とわが本國の上大夫韓隨といふもの内通して李婆にさまぐの恥辱をあたへ
 たる時李婆堪忍ならずと幾度か劔に心つきたれどもいやくこゝもどにての恥辱は我一分
 の事本國に韓隨といふ逆臣ある事我もしこ、にて打はたしなばたれ有てわか君につぐるも
 のあるべからずとこの場の無念をこらへ人にもびさせられ腰ぬけどわらはれながら瘡へ
 歸り韓隨が逆意にて楚と内通する事をひそかに君へ申迄韓隨をころま急に旗をわけて楚の
 國の油断をうちたるといふ故事有旦那のこ、をこらへて御上京なされた國もどがかたまり
 く悪心一味と見へたるよしを若殿へつげしらせ給ふの齊の季婆漢の韓信がつくしとたる堪

忍の忍の字の要の場大丈夫の勇といふと一たんのいかりに身を亡すたぐひに非すよくがて
 んが参りましたかさあ旦那いそぎ都へ御上りなされませい重三郎侍供と身しめ懐中より燈
 袋とり出し千年硫をわはせて重三郎に挑燈とぼさせ南海道より勝木浦へかいらんと城下を
 はなるること十七八町長松原とて左は海右は山そはいと物さびしき道を三人打つれいそぎ
 けるはるの向よりてうちん貳はりたれ成らんと見る内に七八人の人音すでにまぢのく成け
 るをわざとよけて通らんとせしがてうちんの跡より来る侍かぶと頭巾をとり是はくくめ
 づらまや京都へ御供なされし四日市勘太郎殿ではござらぬかと詞をかくるにつけ勘太郎も
 せひなく是は御代館赤坂五郎四郎殿かまづ御堅固で珍重に存ると言は五郎四郎さればく
 京都當みたに様の御舎弟桑名半九郎様御用にて袋井大五郎殿より申來りさうに金子三千兩
 さしのぼさるゝにつき御家老衆仰付られにて拙者様は舊冬にしつたてより南御領分へまか
 りこしやうく三千兩百姓共よりさし出させあれ傍覽の通りすなはち百姓共を人夫にとり
 千兩箱三つにないせて罷りかへりま扱くしつめての儀ゆへ百姓方にも金子これなくめ
 いわくがるをあるひは家財道具をうらせ娘なきあるは急に奉公にも出させ權威を以てと
 のへましたが貴様には時ならぬほくたりさだめて半九郎様大五郎殿より北指圖にて此金子

請取にかなござりしかと云ふに勘太郎何てもよ鳥おかしりしと日頃ば實然なる男なれどもわか殿の御なんぎにとかへられじと若とう新五郎草履取重三郎にめくばせめてよい御推量でこそござれいにも平九郎様ことの外さう成御入用ゆへわたくしにまかり下りうけ取のぼる様にどの儀それゆへたゞ今まで御家老袋井三甫右殿方にはなしまのりありしがわたり貴様がねそさゆへ南御領の路次まで出むかひぢきにうけ取のぼれとのさしづに任せさてくよる是にまちましてござる時分から申三千兩さう成ねはたらき申さん儀もなき御手からくはしく平九郎様へも申上て急度御ほうびのあるやうにねどりなま申ませう家來共ねかねうけとれといへば赤坂五郎四郎も是とさいわゆるの事といはんとせしがいやく大分のね金かやうの野中にてわたさん事いかゞと思ひ御尤に存るが且たくしへの御家老三甫右工門殿廣右工門殿より仰渡さたる儀なれば何ふん一まづ三甫右工門殿御宅へ持参いたしそのうへそこともへは三甫右工門殿よりねうけ取なざるゝが順と申してござるさあ〜一所に御同道申ませうといふを新五郎あとの方よりや〜五郎四郎様そりや御念が入すぎましてござりまする平九郎様よく〜の御急用なればこそ旦那勘太郎を且さ〜にくだしもなされましたれかれ是中内に一寸でもひまされれば御ためにあしうござるこゝでねわたしな

されまするが御奉公のひとつと申ものといへば五郎四郎むつとしましたものゝ分としていらざる口上それとも道にてねうけ取なざる。様御家老衆の手判でも取てござりしかといへば勘太郎大小まへにぬき出しひりひつからげムゝすりや此四日市勘太郎をうたがひ召るゝか弓矢八まん武士がすたり申す金はうけとるまいがその方が首をうけとらんと立はたかつてぞぬたりける

◎小判の箱の打わりたい又九郎が心

忠に因て行ふ時の細悪をなすも亦是善なりと古人の語によりて四日市勘太郎若と新五郎草履取重三郎共に覺悟さばめ是非三千兩を取てわか殿の御難をすくはんとこのころさし殺氣眼にあらわれしかば御代官赤坂五郎四郎こゝは大事ぞと家來ども百姓ども無法者にかまはずと大切の御金心をくばつてさあかう來れど行過んとするを重三郎まづ手まへのてうちんふさげせば新五郎すりちがふて五郎四郎がささへもたせしてうちん張切てれどまけるまゝ五郎四郎すはしれ物御金か大事ぞといふ詞をたよりに勘太郎はつと寄てむなぐら取かづきなげに松の根ぐもへどうとなくれば五郎四郎ねさあがらんとするを勘太郎二三間ばかりけとばし新五郎重三郎百姓共ふちはなして金箱をうけ取れといふ聲に五郎四郎臆をつ

ふしこりや侍をけたなと刀ぬいてめくら打に打まをるを勘五郎はすかしよつてうしろよ
 り引とらへ刀もぎはなしましたふつふまになびつけ金子の事どもかくも武士がうたがはれ
 て一分がたつものかそれゆへ蹴とばした此れ金しゆひよく手にいれれば若殿様の御身のうへ
 はまことにめでたう侍けると又さんぐにふみつけその間に新五郎重三郎ぬきつれて切て
 かしうしゆへ下部百姓命からく金箱すて置にびちりける新五郎十三郎てうちんさぐりあ
 たり火打にあはすくわつちくの壁の内に勘五郎は不便なれどもせひに及ばずひらりとぬ
 いて五郎四郎がさう腹を左よりつきぬけばさつさ右の肩へ出てくるしともだへるをてう
 ちんとぼしてまびよくとめ迄さしどがもなき者なれ共金の宰領と成しが身の南無あみだ
 佛と廻向しこりや新五郎その方は十三郎と此れ金を持参しわか殿七三郎様の御難をすくふ
 てくれよ人をころし身がいさながうへてはせんぎかむつかし是までなりとすでにおまはだ
 ぬいて切腹と見ゆるを新五郎十三郎あはてとど先中も新五郎こゑをあら、びふ、こりや
 むこなたは物にくるとつしやるかこなたがればてなざる、と彌此金のゆくゑのせんむ
 つかしく成て若殿様へせんぎのかゝるは必定こなたの若氣にて金子は入らねばならぬあ
 る故わざくお下りなされ御家老衆へ若殿の入用とかたりことを侍られたれ共さすがは御

家老衆の眼力わきとかにて此かたりこと調ぬゆへむなしく罷歸なされ道にて三千兩の金子
 を見かけたま取にいたしせひなく五郎四郎殿を討てた立のさなざるゝとの書にきでもな
 れた立のさあらば此罪御一分にかしつてわか殿様へ御ふんぎとか、りますまい何と此御が
 てんか参りませぬかと地をた、いて諫ればあやまつたいかにもさうじや死と一たんにして
 かろく生は重しといふ成ほどその通に取はからはんと矢立の硯はながみにさらくど書の
 へ四日市勘太郎判じした、め死骸の帯にむすびつけ三千兩を引かたげさせ案内はよく知り
 ぬ穴山越といふ常に人の往來せぬ間道よりとぶがごとくにいそぎける下部百姓にひくりに
 うつたへしにより檢使として濱松又九郎石部段四郎かけつけ死骸をあらため程はあるまじ
 ばつかげよと六組の足輕をわかち濱づたひそはみちそれく手にくばりし上を下へかへし
 ける中にも五郎四郎が女房はかしは木といふてもと名題の舞子なりしが又九郎女房にせん
 とれもふ内五郎四郎うけ出まて妻とせしゆへ日頃又九郎心にかしり居たれども夫あればよ
 しなき事いひ出すも道なくこがれくらむけるに何でも此後家は此方へ取こむべしとおもふ
 所へ供の者どもがしらせにより五郎四郎女房かしは木十三になる娘と十一なる男子をい
 ざなひその身もとち巻なきなたよこたへ譜代の若どう坂の下新平もろ共息を切てはせつき

死骸にどりつきのうかなしやなさせなやと更に正躰なかりけり十一になる幸太郎が申かゝ
 さまころしたやつはたれでござるかたさ討して下されといへば姉のいくよも幸太郎ようい
 やつたかゝ様なく所じやない又九郎様段四郎様かたさが討たうござるとわつとなければ又九
 郎サ、でかじめされたさすがは武士の子で恥じやる思かしの木どのかやうの時はずからな
 い物じやまなれた五郎四郎と身の兄弟同事にはなしたれば遠慮のない皆く手まへ宅へ引
 こされよかたさ討の相談もいたして進せうとまり目に物をいはずれどもかきは木は心もせ
 ぐりそ所でなければ忝うのござりませぬれども相手四日市勘太郎の京へのぼりたるはまぎ
 れなしまかれば是よりむたくまも京へぼつかけいかやうにいたして成ども夫の敵子どもが
 ためおは親のかたさうたすにはたさますまい四日市勘太郎とさりむすばれまするまでは家
 來共も見てかへりたれば敵の明なるに一刻もゆだんはいたしがたしヤア何やら帯にむす
 ひ付てあると書付をひらき扱は自分入用の金子のためにころせしとの儀いよく以てにく
 きいたし方とかけいでんとするを若どう新平是はしたり是はしたりと立ふさがりして京へ
 はわたくしもお供いたませせうがね心あての逗留所はとほれそちたちもまゐるまいみづか
 らが父は都北の院の御家人梅小路長十郎と申せし人なるが兄澤村法眼と不和になりその、
 ち浪人して備中屋長右工門にて此北國へ下りみづからは舞子と成五郎四郎殿と夫婦に成た
 り絶てたよりはなれども北の院の候人澤村法眼訥志殿は武藝の達人とさけば姪でござる
 夫のかたさ討せて下されといはゞよもや見すではせられまじさあ新平こしらへよといそぐ
 を又九郎は是く新平女中の長たひ難儀であらふあどのとりしまひ諸道具の身が方へひき
 どりせわいたさん氣づかひめさるな勘定がたよりうけ取をさゝ金子あり合せて是を路金に
 えてかきは木賊不自由にない様に船駕こころをつけめされと鼻紙袋より金三十兩取出して
 跡から追々金子のぼし申さうと下心ある仕入ととえらす此北情いつの世にか忘れんと欲
 かた手にいたゞくかまの木が免もとのかはゆらしさ又九郎かさねて大かた身共と段四郎殿
 も此せんぎに明る比よりのぼるでござらうしかれば此方にて勘太郎を尋いだしたゞばさつ
 そくそこともと旅宿へたしらせ申さう其た免折々を見まひも申て方になつて進せうかならず
 夫にわかれたとて方なうおぼしめすな身不肖ながら身共を親ども兄共夫どもにばしめせと
 あぢな所のことばをにしませけれども心つめねば只御心底添しとばかりにてかきは木は新
 平打つれ二人の子共さきにたて濱づたひに急ぎける方一いをたお候の内にかくれる事
 もやと顔分の村々さびしく廻状して人相をかきせ船手山手廻るかたなくさがせども更に

ち浪人して備中屋長右工門にて此北國へ下りみづからは舞子と成五郎四郎殿と夫婦に成た
 り絶てたよりはなれども北の院の候人澤村法眼訥志殿は武藝の達人とさけば姪でござる
 夫のかたさ討せて下されといはゞよもや見すではせられまじさあ新平こしらへよといそぐ
 を又九郎は是く新平女中の長たひ難儀であらふあどのとりしまひ諸道具の身が方へひき
 どりせわいたさん氣づかひめさるな勘定がたよりうけ取をさゝ金子あり合せて是を路金に
 えてかきは木賊不自由にない様に船駕こころをつけめされと鼻紙袋より金三十兩取出して
 跡から追々金子のぼし申さうと下心ある仕入ととえらす此北情いつの世にか忘れんと欲
 かた手にいたゞくかまの木が免もとのかはゆらしさ又九郎かさねて大かた身共と段四郎殿
 も此せんぎに明る比よりのぼるでござらうしかれば此方にて勘太郎を尋いだしたゞばさつ
 そくそこともと旅宿へたしらせ申さう其た免折々を見まひも申て方になつて進せうかならず
 夫にわかれたとて方なうおぼしめすな身不肖ながら身共を親ども兄共夫どもにばしめせと
 あぢな所のことばをにしませけれども心つめねば只御心底添しとばかりにてかきは木は新
 平打つれ二人の子共さきにたて濱づたひに急ぎける方一いをたお候の内にかくれる事
 もやと顔分の村々さびしく廻状して人相をかきせ船手山手廻るかたなくさがせども更に

行方まればざりければ家老中相談の上濱松又九郎石部段四郎に足輕百人さしそへ急に捕手に
そのばまける

歳徳五葉松一之巻終

第貳卷

◎是はさうそれはさう同氣味たる身請

春の小馬は也免に見てさへよいとややそ是はさうそれはさう見てもかうみても契情ほ
きくつさりとされい成ものはなくふとれもしろいといふ圖にのりか、つてと心の手濁もひ
かへ場見へす鼻毛の腰帯のびたる所を見すまじ臺頭末社がしりかゝるもづらみ取付ていさ
みにいさむ内に身躰は大津馬のれひがらしの様に成むかしの榮花をれもひ出せば驚馬にお
とりし身のはて情かけてれるた料理人さいく羽織やつてうれしがらせたる臺頭も道で物
いひかけんとすれば馬の耳に風とそしらぬていにくしと思へとも思へばわが姿正月のうら
さむさに紙衣ひとへみ笠さへあぼろ月もりてしのふにあまる軒にさまよひ六條三筋町を
うろつくは粹のはてと見て通しとが免さるも所で仕立しぬぞかし思ふれとこにあこれとせ
いで思ひがけなやよとの花となげふしうたふわげ屋町のにぎやかさ品川屋の瀬川たのへ玉

澤喜代崎など打つれあもむ八文字金屋勘右衛門出むかひ是は太夫さま方この外の御もつ
たいれさやく機方に三年程さきから御入大あくびでれまちなねいさこなたへとさばぐに瀬
川ハ紙子男をちらりと見るよりしてけふの机客はさなたでござんすととふに勘右衛門是は
ちか頃わやまりましたしてござりまする先客懐の御名は存ぞませね共りつはなれさふらひれ
つれ様とござりませぬが瀬川様よびましてくれよとのれたのみ大かた六七日も前に申こま
ねば御來臨かなとぬ君さりながら申上てと見んとよもやとは存じながら申上ましたれば存
の外御來迎ちか頃ありがたし尾上様玉澤機喜代崎様は外の机客此れつれの内よりもせひ瀬
川様をどの机望なれども中二階なれさやく機が御先ゆへ何とどのちはさちよつと成どもか
りましてわげんど當座の間をくろめましてござりまするごなたもはじめながら口の茶や
次郎助の御供そまつはござりませぬといふに尾上は何と瀬川さんうさつとめどはいひなが
らいづくのたれどもまねぬ机客へつとむるといふ事よよるべさためぬ身のうへでいござん
せぬかいなどいへばさればいなどてもろくにはつとめぬじしが身の上まねかんす机客の机
心がきのきく此中はこの外氣色あしけれども勘太さんのたつて申てくさんしたゆへ座敷
ばかりのつとめ房二郎やがてんかア、イとかふるが心つて紙子男を見へすがくれに中戸あ

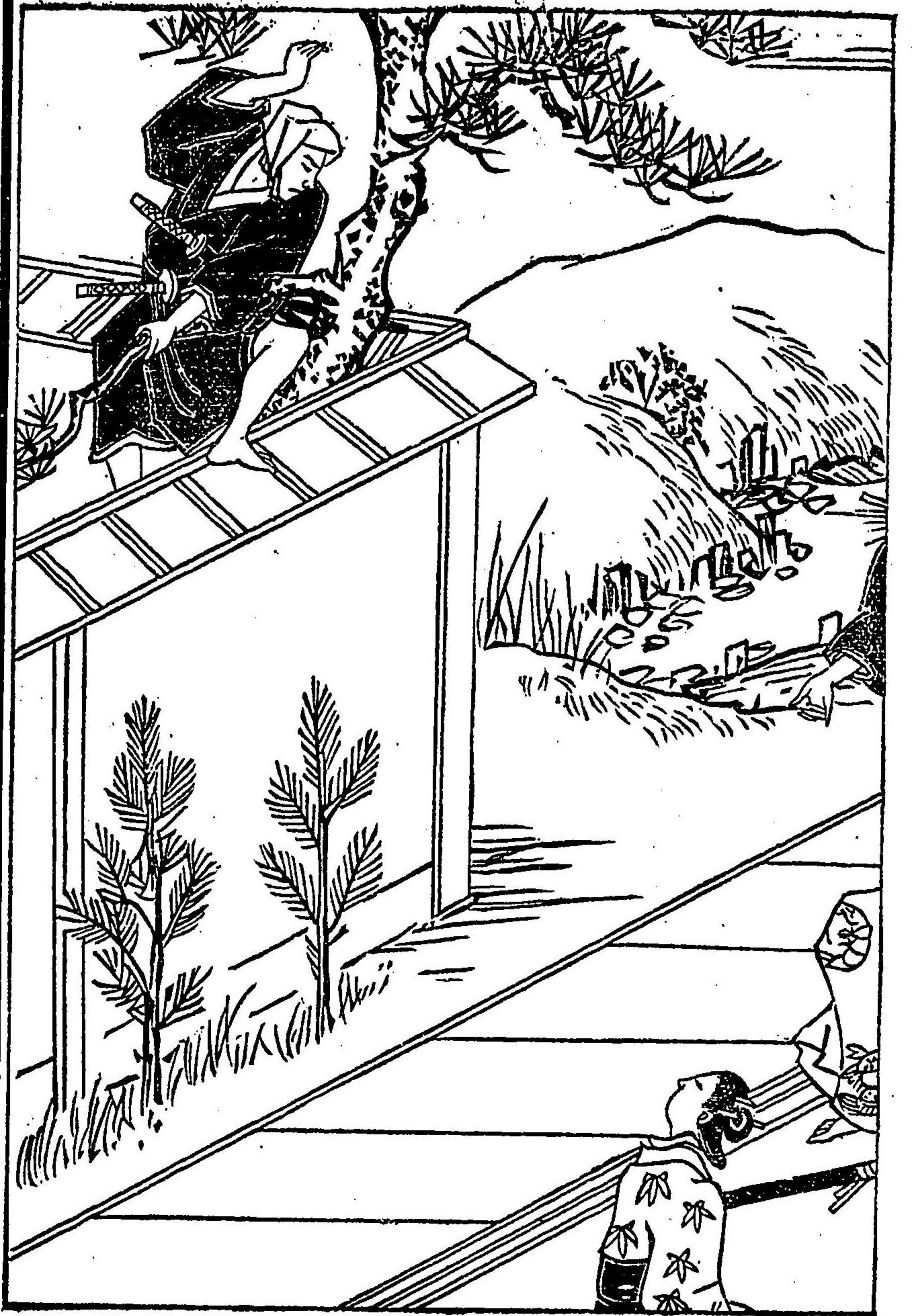
しのばせ女郎はとなく／＼盛所へあがりて尾上玉澤喜代崎は奥座敷へゆけば瀬川のこれ必
 なしますなとかふろにさしやち中二階へどわがりけるたいこ女郎がさときの小歌何れ御の
 春とここの事成べし盛所に人なければ紙子男をつとわがりかぶろの房次郎をまねきア、
 さむやく／＼酒のかんひとツア、イと心へて入めしのび持てくれはいやく／＼盃は昔の事こ
 のちやわんで引かけんといきなしふたつぐつどはし大夫が最前座敷ばかりとこととつて
 のつとめころろさかうれしひこのすがみ子ひとへの七三郎に心中たてしくれるはし、て
 もわずれぬしたがむりにつけざしなごしと客めがいふまいのま、のか日よ一ねいりいたそ
 ふ房次郎たれぞきたらばねほひに成てくれよとこたつのすみへぐつすりとはいり身をち
 めふどん引のふりふしたりける中二階よりたく／＼手にかぶろは中七さまちよつとといて参り
 ませうたれおも見られぬやうになされませいのちほごしゆびして大夫さんにはせませう
 どへと所ふそだちしとて小ざかしくアイ／＼の返事も山さりの尾の長としつたひにわが
 れば瀬川勝にてアイ何のいつはり中ませうサアねて心のたけはわかませうと下へもれば
 七三郎むつとし聞耳すれば男の聲にては見られよ三千兩ろへて持参すなはちたゞ今うけ
 出して歸るさいせんさしやさめひ参事外くもらすいかにもしんじつ請出さる、といふさ
 しやうが書てもらひたいか、いので何といたませうもひはをれをつきませうへとさくはさ
 こたへかねし七三郎さて／＼あきばいたため犬をちくしやう免おのれゆへ大名の子が此な
 りに成たではないかたのれつかみころしていや／＼まやうねのくさつたやつにさつつけて
 はこつちもまなねばならぬ恥のうへの損といふものたまされたる此やうのためけ高がうり
 物といふに心のつかぬがあやまりそうじやかへりませうといふ内表の方よりたさ／＼の武
 士金屋勘左衛門とは是か亭主にあひ申たいとの儀勘左衛門すなはち是にありヤア旦那まづ
 こなたへと拙で庭薄だうけの口上にくだんのさふらひあみがさもどらずコリヤていしゆは
 じめてあひしゑるしとはながみ袋より五両くわつどはづめバ有知のようがうや月すまよし
 の神だなへ燈明あびはさかづきそれまづ表二階さうぢさせいといふを是／＼亭主さひぐ
 にふよばず聞及びし瀬川といふ大夫よんでもらひたいといふに亭主わたまをかきその瀬川
 さま事でござりまするすなはち今日はわたくま方へはじめての接客での成成すぐに身請の
 御相談瀬川様はふかまがござるゆへよもやと存せしに思ひの外恥うれしがらせられのち
 程わたくしに金うけ取親かたへ口たしさらりと手をうづはつはいたしたきましたゆへちよ
 つともかりましむくひ首尾と聞てこたつのすみにい七三郎胸をもやし涙をながしてはらた

しやうが書てもらひたいか、いので何といたませうもひはをれをつきませうへとさくはさ
 こたへかねし七三郎さて／＼あきばいたため犬をちくしやう免おのれゆへ大名の子が此な
 りに成たではないかたのれつかみころしていや／＼まやうねのくさつたやつにさつつけて
 はこつちもまなねばならぬ恥のうへの損といふものたまされたる此やうのためけ高がうり
 物といふに心のつかぬがあやまりそうじやかへりませうといふ内表の方よりたさ／＼の武
 士金屋勘左衛門とは是か亭主にあひ申たいとの儀勘左衛門すなはち是にありヤア旦那まづ
 こなたへと拙で庭薄だうけの口上にくだんのさふらひあみがさもどらずコリヤていしゆは
 じめてあひしゑるしとはながみ袋より五両くわつどはづめバ有知のようがうや月すまよし
 の神だなへ燈明あびはさかづきそれまづ表二階さうぢさせいといふを是／＼亭主さひぐ
 にふよばず聞及びし瀬川といふ大夫よんでもらひたいといふに亭主わたまをかきその瀬川
 さま事でござりまするすなはち今日はわたくま方へはじめての接客での成成すぐに身請の
 御相談瀬川様はふかまがござるゆへよもやと存せしに思ひの外恥うれしがらせられのち
 程わたくしに金うけ取親かたへ口たしさらりと手をうづはつはいたしたきましたゆへちよ
 つともかりましむくひ首尾と聞てこたつのすみにい七三郎胸をもやし涙をながしてはらた

つるこそ道塵なれ只今きたりし侍まで瀬川身の代はと皆までにはせず三千兩でなければ
くるわの門は出さぬと親方掛川屋三十郎かねて申さかせしゆへその通申ましたれば直に三
千兩いたし見せなされ後ほどうけ取申はづ大夫様もいかひ悦びといへば、しかれ
ばまだその方手へはうけとらぬな家来どももたせしはさ箱是へと内より金五千兩取出し
是見たか三千兩に千兩はねやかたへのほうびのこつて千兩いその方がはたらき料にくれる
中二階の客衆よりいまだ手取せねばささまつたといふ物にあらずさあ身は今五千兩わたし
申す瀬川が身請してくれよコリヤねやかたもその方も千兩づ、の外のまうけ何とくとい
はれて勘左工門慾に先約をもわすれいかさま手取いたさねばきはめました共申がたし一刻
でも怠たくし手へとやく入しが身請のまゐるしといふ物と金子財布へふしこまんとする所
になく座敷の客共亭主くとよびたて酔ららして女郎に介抱せられながら立出瀬川をよべど
いへば中二階に客ありとの事後ほごかりて進せんと約束してその埒もあけず金に眼くらみ
それ成かたへうけださせんといふ侍をたわけにしてまたせ置たるか身をたれとか思ふ
大松左京大夫殿の御家老の御惣領袋井大五郎是なるも御用人濱松又九殿石部段四郎殿に
たづねものありて國よりのばられぬそのたづねもの、事に付て瀬川にはあてねばならぬ
サアあはせばよしなぢむぢぬかまどまつふたつにしてくれるなんどくどつめかくればそ
りや御無理と申す物身うけの相談な内ばかりても進ませせうと申がならひ今ねさ、なさ
る、通これにござるに侍様五千兩と申すお金の御威光何ほささしくと侍られまても差
あつて一兩でも多くしてやる方こそでに成ませぬわたくしもくるわでは男をとがくも
のでござる大松様の御からうよば、り何共存じませぬ瀬川さましく是へござりまゐたはじ
めでのれ客衆へ身うけの手をうちましたさあ、はやくわたりさつまやれませといへば瀬
川がこゑにてあななめた何事じやのわしたも得心させず身うけとい何事ナアぬしさまより
外へはもかぬどの詞に七三郎いはらわたのひつくりかへるほははらがたてども大五郎又九
郎殿四郎が見るまへいかゞとはざしりしてしのふ所に中二階のさやくコリヤくいていしゆ
三千兩待参まで身うけせんと申わたまたるは此方が先サア金うけとれと千兩づ、み三つ中
二階よりなげいだすに一つ、みはしごにあつてむびめどけ千兩ちらし山吹の瀬川と男
に引そふて外へともかじとはり合ける

◎新四郎か姿は極印打た男だて

乗妙典に七寶をどかれしその最第一を金銀と立られたれば膝に以ふ地獄の沙汰も阿彌陀



如來の印相のごとく成べしいはんや色里のさはぎいかばかりなる粹な客でも此光ひかつかねば穴のない火吹竹のごとくむかふにくわつとこれこつて来る全盛見へす揚屋とは油どりあつかふ豆腐屋の事と心得たれどもちと夜當が座敷をかなまはる事であらんと思ふて居らるゝわろにてもとじて出かける座敷から時先く太夫にいれ齒のつなぎのきれたるを繋がせ引舟にわかぎれそくとすれば御そく才な御とあしでねめでたいと追従たらふくつるてん右頂天になつてまく小判の威勢に出かゝつた化物もまゐりごみし目に見へぬ鬼神を感せしむる事ひとへに幾水入のそこはかどなき人情なるべし亭主勘左工門はじめは中二階の客の三千兩にて瀬川をうけ出さるればねつとつて十分一三百兩と悦びしが今來りしあみがさ大盡三千兩の外に親方へもその身へも千兩づゝのはたらき代つゝをならべたてゝのたてひきに眠くれ中二階のお客様お金のあわたしなされ様がねそうごさればおぼしめまさられませいとふ内とまこの角にあたつてばらくと亂れし小判を濱松又九郎一兩取あげ見て是段四郎殿見られたか津の字と太の字の極印はね國元のかげ屋津國や太十郎が極印にまざれなしいかさまと段四郎大五郎ともくばらくしたる小判を見るにのこらす津の字太の字の極印あさらかなり扱は中二階なる客といふは御代官赤坂五郎四郎を打て立のさま四日市

勘太郎にまぎになまどんで火に入夏のみしとはさやつが事サアこゝへ出まいか但仕よりをつけてた、さふせ細かけんかど三人ながらしりしつからびうでまくりすればこなたなるあみがさ大盡暫く笠は懸所の儀とめんにあづからんそこの出入は跡でもすむ事亭主瀬川が身うけは何とじやとさめか、るに勘左衛門二も三もごさりませぬ瀬川様是へ引れるしてれわたしせせばすむとはまごへあがり障子ひらく所を中二階の客むなぐら取てまつさかさまになげおろし是くごなたかと存せぬ共拙者が金子に極印の見ればへありとて人の金に手をさゝると心得ず、聞及びし書とびしうとやらいふ者共なその極印は身が打た極印指でもさ、ばそのうで切あつてくれんとねころんでめて三千兩投ねろしたれば太夫はわが物さあさみせんひきやど小歌ぶしにかすれば大五郎こらへかね主君の名をかたり人をあやめ金子をうばひたちのさま大罪人のがれとあるまいサア尋常に細かれば懐中より半細いだしとぐつてかすれば女郎かぶるさてもこわる事が出来たとふるふ内に中二階の障子さなりどあけずそみじか成花色の布子づさんまへへ折こみいつの間あかうらの路次下駄とりよせ是をさきて丸ごしにて立はたかり是日かひ衆男のたて様がさうでないとのつさく下にあるれば瀬川も引そひたりける、その勘太郎殿とやらはゆめにも聞た事なりな

い見らるる通拙者の丁人まかも米揚の仲仕仲間にしられたる日坂の新四郎といふもの、先月廿八日の晩ふと此里をぬきにきたり瀬川が道中になづみ手下のわかひもの共に才覺させし三千兩まちがぬればわたと津の字太の字の極印は見られよ身どもが布子の紋所は丸に蔦ゆへに津の字太の字何と人の金おはでさいてそのうへなわかしれといひのれさふらいはれたわたこめんどうな事聞てゐる新四郎でないいわれやうが日るいと此路次げたをどなたでもわたまへにへこまさにやねかぬ何と丸につたの紋所津の字太の字の極印いふんがあるかわの大だ日け共かといへば又九郎せいてきてよし何にもせよ見しりのある極印たれが手から請取たとせんぎせば勘太郎がゆくゑのまれる手がしりたかや町人ぶちかをして繩かけんと云を段四郎も尤に思ひとつたといふて又つくを左右へなげ向より来る大五郎を庭へつきどばしまり引からけて寄たらばた、きみまやくと下駄かたし手に持用意のてい三人はたさわがつて又つかみか、らんとをるをわみがさ大尽まつたはやまるまひさいせんよりの様子よく是にて見とゞけ申た何にもせよ丸につたの紋所津の字の太の字の極印はいひ日けのたつたる所津の字太の字の極印を各の國にかぎると心得られまか心のちいさいから此場は身が扱ひやた早々歸られよ是からわの町人とは身共がたてひき瀬川を身がうけ出すかあつちへとらる、かのせりふのしもどのわかひ内あこやくかへりたされといふに今それでもとぎしんでは見たれどもさいせんした、かなげつりられすぎわふこりはてたれば是をしほに三人はせひなくその場を立さり表へ出又九郎を屋敷へ注進にかへし段四郎をたもての水ため桶のわきにかくし大五郎之門にそうたる松の木によちのぼり様子にかゞどうかひける新四郎はサア亭主身うけと何とするといふにわみ笠大尽成るや一言にて先にはそれしとあれば町人とても無理はいたされまゝとくと和談いふし相談づくにいたさう亭主金どもあつめ一所あまて奥へもつてこい新四郎とやら町人あひけなげにつがもなればたらさかんまんいたした先かうござれと打つれ一間へいれ亭主三千兩と五千兩やり手引船女郎にまではこばせれくをさしてぞ入にける跡には瀬川とつうたいいついなしましてくれなといふたのに七三様くどたづぬるうしろのこたつのかげより七三郎目をなきよらしめいさつもなみだながら瀬川をなげつけいさげいせいの大がたり免此やせがますなれれを見すてあふたりも三人もなげちらす精も力もつよ職を見こもに新四郎めとやらにさしやうかさませうとは此口でぬかしたか此ほうげたでぬかしたりエ、はんくわい辨慶つくばうとすまたの様な力がはまいなわの新四郎免をぶちころしたうても力こぶを出きて見る程こん

い見らるる通拙者の丁人まかも米揚の仲仕仲間にしられたる日坂の新四郎といふもの、先月廿八日の晩ふと此里をぬきにきたり瀬川が道中になづみ手下のわかひもの共に才覺させし三千兩まちがぬればわたと津の字太の字の極印は見られよ身どもが布子の紋所は丸に蔦ゆへに津の字太の字何と人の金おはでさいてそのうへなわかしれといひのれさふらいはれたわたこめんどうな事聞てゐる新四郎でないいわれやうが日るいと此路次げたをどなたでもわたまへにへこまさにやねかぬ何と丸につたの紋所津の字太の字の極印いふんがあるかわの大だ日け共かといへば又九郎せいてきてよし何にもせよ見しりのある極印たれが手から請取たとせんぎせば勘太郎がゆくゑのまれる手がしりたかや町人ぶちかをして繩かけんと云を段四郎も尤に思ひとつたといふて又つくを左右へなげ向より来る大五郎を庭へつきどばしまり引からけて寄たらばた、きみまやくと下駄かたし手に持用意のてい三人はたさわがつて又つかみか、らんとをるをわみがさ大尽まつたはやまるまひさいせんよりの様子よく是にて見とゞけ申た何にもせよ丸につたの紋所津の字の太の字の極印はいひ日けのたつたる所津の字太の字の極印を各の國にかぎると心得られまか心のちいさいから此場は身が扱ひやた早々歸られよ是からわの町人とは身共がたてひき瀬川を身がうけ出すかあつちへとらる、かのせりふのしもどのわかひ内あこやくかへりたされといふに今それでもとぎしんでは見たれどもさいせんした、かなげつりられすぎわふこりはてたれば是をしほに三人はせひなくその場を立さり表へ出又九郎を屋敷へ注進にかへし段四郎をたもての水ため桶のわきにかくし大五郎之門にそうたる松の木によちのぼり様子にかゞどうかひける新四郎はサア亭主身うけと何とするといふにわみ笠大尽成るや一言にて先にはそれしとあれば町人とても無理はいたされまゝとくと和談いふし相談づくにいたさう亭主金どもあつめ一所あまて奥へもつてこい新四郎とやら町人あひけなげにつがもなればたらさかんまんいたした先かうござれと打つれ一間へいれ亭主三千兩と五千兩やり手引船女郎にまではこばせれくをさしてぞ入にける跡には瀬川とつうたいいついなしましてくれなといふたのに七三様くどたづぬるうしろのこたつのかげより七三郎目をなきよらしめいさつもなみだながら瀬川をなげつけいさげいせいの大がたり免此やせがますなれれを見すてあふたりも三人もなげちらす精も力もつよ職を見こもに新四郎めとやらにさしやうかさませうとは此口でぬかしたか此ほうげたでぬかしたりエ、はんくわい辨慶つくばうとすまたの様な力がはまいなわの新四郎免をぶちころしたうても力こぶを出きて見る程こん

やくの様な此うで腹がたつてならぬだまされたが口にしとふんづければ是わか殿さま
 とつくりと心をしつゝ来てきかさんせといへ共その涙にいくたびかこりはてた者でござるさ
 らばれいと申とわみがさ取て立んとするをへたつた一こといふ事あり聞て下さんせと
 取つくをふりはなしわみがさかぶりゆかんとすればやらぬくどかさを取て引とむれば
 男だてのねかさまになられたれば力までのつよふ成てこりやかげきよがしころびさかして
 ろともに縁をさるしるしことなせといふを瀬川はなくやらくきくやらたまへどわしが
 うなつたはなきたいの事かいな起請せいまを一まん枚かいてもそれはつとめのならひ
 しんじつしん底の心のさしやうあまへわすれてござんすか瀬川はそれ係を水くさい女郎
 と思ふて下さんすかさよくがないなさけない當みだい様の弟御平九郎様手をまはしてわし
 ぞうけ出すとの事ハテなんどせうかとせうと心の糸のかきみだれしたまへとわしが中を見
 かねて四日市勘太郎様はね國もとへた金さみかくにくだらんしたれどもいまにたよりもな
 くいかにと思ふ折ふしめの新四郎殿といふはなといはせもはてす七三郎ははて聞でもない
 なかくさき新四郎が三千兩にくわつたといふとなし鼻毛の數々よつくされしれにさ
 けとの贅はなしかこ、はなせばななねばといふてから及物一本なければエ、むねへなこら
 がたつと口舌もことわりとぞ聞へける

◎年よし世よし出家の方便

此口舌の盛れくにもれさこへんすまさつとわけさすれば日坂の新四郎と名のりしは頭巾を
 取懐中より薄衣いだして上座に直りわみがさ大盃も笠を取て座するを見れば櫻山三位殿の
 雑掌神原海老蔵にて是七三郎様つがもないれ身もち故かみこひとへの御難儀と承り手まへ
 主人櫻山殿息女花つま姫にはれいくなづけの事もへ物をもあがらす戀しいとしのなげきま
 よせん瀬川殿をうけ出し此方の御殿の内あひそかあまつらひをかは七三郎様にもあ入なさ
 れまい物でもないど過分の金子才覺いたし瀬川殿身うけのためまかりこしたる所われなる
 涉出家は日坂上人と申て八盤の坂東寺の御住持すなはち手まへ旦那三位殿の乳兄弟澤村法
 眼の旦那寺にて澤村法眼花つま姫のなげきを聞いとしはしく存られ都合ざる事なれども日
 坂上人をたのミ學寮一の勇力といふをたのみにも瀬川殿身うけに涉出たがひあさいせん
 より名のりあひましていづれから申すも七三郎様と花つま姫御こんれいあひどしのふ様ど
 の儀瀬川殿へはれ上人よく〜教化なされて一先七三郎様もろ共さく山殿の御殿へいさ
 なひいかにも瀬川殿事涉せばにつとめらるゝ様に取はからひすつもりさなければ悪人ぞ

も此うへいかなる事ぞかたくみ大松の松家滅亡にこれよばんもはかりがたしと申七三郎様に
 身のうへの大事といふ事を瀬川殿よくくのみこまれしもれたためをまもりありたり扱は御
 代官五郎四郎殿を打て立のかれし四日市勘太郎殿は八鹽村の坂東寺に居られまするか是さ
 へ注進いたせば日れら急度したる地行取なる事ことばをつかひましたとかげ出すを海老藏
 立て引かつきひさの下に引しき三尺手拭にて口をゆはへひつどもうごかさぬに上人は是れ
 か殿もしさくら山殿へ御入なされまいとござれば愚僧が出家の行をふりすてかりにも女に
 たはふれしせんばたしぬと申す物しかれば是を寺へもかへらすいかなる淵へも捨身いたそ
 より外へござらぬどの詞のつめに瀬川も愛をたきし口けなければ身のためもよろしから
 ずわか殿さまよりさくら山様へまいりにくきは此瀬川なれどもすへのふためとある事なら
 ばいかなるうさめいとはぬ心ゆゑさいせんより上人様へ異義申まをまいとのせいしを
 かさましてござんす是であうたがひをこらしてぬさんせとなくと七三郎のあやまつた大
 夫かんにんしてたも心のせくまにむごい事ばかりいふてあいつかしてたもんなどわび
 らるゝこそ道理なれ海老藏は亭主勘左工門を中二階の柱にくくりつけ障子さしわが持參せ
 し金子の内三千兩を七三郎殿へわたしいづれもく先これへとて次の間へ引こめて瀬川に

やかた品川屋をよび七三郎殿直に三千兩わたし瀬川が手形と引かへにして手をうち品川屋
 は金子もたせてぞ歸りけるさあ残る所なしといづれも立出んとせしが亭主をしばりすてに
 もしてさきがたく繩をどき海老藏うでもぎあげたのれにはせんぎ残りしやつなればつれ
 て歸るに繩つけては目になつちつ共うごめて見よどねちあげく七三郎殿をさきにたてし
 出んとする所を松の梢に隠れし大五郎見すかして手裏劍いづしとうつを海老藏さうあらん
 と思ひこいつをひきたてたれを勘左工門をさしあげければ手裏けんあやまたず勘左工門が
 胸にたつてうんどばかりにいきたへたり大五郎仕そんじたりと又一本うたんどする間に海
 老藏松の根ひとゆすゆすれば根はくわつとくつろぎ大五郎はまつさかさまに踏ながら心
 さ、にてやがてたさあがりあとも見ずしてにびうせけりかゝる所へさいせんちうまんに
 かへりし濱松又五郎大勢召つれ高てうちんたてさせくつわ品川屋をひきたてさあくの
 れぬ所迄付管領の檢斷衆是へ見ゆるといふうちささをはらはせ管領の檢斷兩人床凡にか、
 り人をころし金をうばひま本人は此場へ來らぬともその目じるしある金子にて契情をうけ
 出したる新四郎とはいづれなるぞといへばわかとの七三郎出給ひけいせい瀬川をうけいだ
 せして拙者新四郎と申ものはこれなしと申さるるを又九郎いふまいくその身請の金に

津の字太の字の極印が證據と申すゆへ檢断新方品川屋が手まへより右の金子をのこらずは
 ぞかせて見るに一兩も津の字太の字なければかうでこないところその新四郎と申やつはすそ
 みじかなものさたるれとこだて家さがしなされてくだされといふにつけ家さがしするとき
 上人はわざと佛前に燈明あげてにやくむにやくと經よんで居らるゝにはこころもつか
 ず檢断大きにいかり濱松又九郎をぎんぐにしかり万事あとかたもなさなつぱりをうつた
 へさうどうにたよばせらるゝ段ふとゞき千万さつと申わたす子細あれをすひつやう乱心
 とわひ見へたればその分にさしゆるすとの儀又九郎はつふやさしくふしゆびに成てど歸り
 ける檢断何れも立歸れば海老蔵もづれもをいさなひ立出る所をさうはさせぬとさつてかゝ
 る段四郎をぬきうち二つとなし傍成井戸へけこみまづ〜とこそ歸りける

歳徳五葉松第貳卷終

第三卷

◎やんらめでたややんら樂しや法眼が住居

夏子益が奇疾方に異病をのせて後の考とし鞍餅餅に水淫潔癖をのせ傳へし其癖その疾穢に
 有て聞の速紛五穀をさらひ遼東の奏和垂絲の海燕をうたがふたのノ其失われざるその能

あれた取べきを取舎ぐとすてん 臥蝶和尚の暗録に見へしもびにさる事よ都の北に澤村
 法眼といふ人あり數世兵術の家をつたへ北の院の候人につらなりとしつもつて四十歳何く
 らからぬ世わたりに妻のしげの井田會武士の妹ながら京なれて夫の心あふ坂山花開とい
 ふ下女も氣に入階代の若紫戸塚音八むまれつきたる正直もの手をつかへ八鹽の坂東寺様よ
 りことづかりしとてコ、コ此處を柴ウ、うりがコ、ことづかつてモ、申て歸りました
 とさしいたせば法眼さつとみらき見てよ坂東寺より狀通外人もらすな姪のかしは木はま
 だ歸らぬかア、又痔のかこつた女房共こたつてくはつと火をといひすて線香たりくへ手を
 ふすべ蒼宮柱て邪氣をこらひ手水つかふも六七十へん障子あくるも自身はさたなく數居こ
 ゆるにやつくるりと三遍まはるも癖ながら立居に隙をも取まへし女房しげののヤア替弓の
 はるかに聞ゆるにかしは木様のたかへりさうなといふ問はどなくれや子三人わりどうの新
 平なと出たちあみがさふかくさ、らをすりやんらめでたややんらたのしや千田や万町の
 鳥追が参りて宿かろど申すやさかりさふらはや殿もさへさふらふハテウかくくる内はや
 むれがれが法眼様のたやまをと替弓をさせんらるしきにつしませあみが取て所躰つくる
 ひ立かへればしげののり出もかひかたきのありかを尋んとて毎日やつせま伊すがたいく野

標もさぞにくたびれなされつらんけふもにぼしをたしむたる事はござりませなんだかごとへ
 ば供の新平東寺九條の方より鳥羽へかゝり歸りみちに六條の契情町へ参りましたればきの
 ふ金屋と申おびやふ大もめがござつて津の字太の字の極印ある小判三千兩にて瀬川と云契
 情をうけいやく其小判にその様な極印はなかつたがと口づのうはさ一決いたしませぬさ
 りせん途中にても奥様へ申上する通わたくしは今晚又契情町へ入こみどくと聞さだめた
 うござりまするといふ所に表より案内して濱松又九郎でござるこれにかゝつてござるかし
 い木殿へ急にたれめにかゝりた事あつて参つたどの口上音八がきもりちらして皆までいば
 ぬに國もとをいでし時路金をかして下され何か懸にあづかりまねかたちよとたれめにかゝ
 らずばなるまひまづ表座敷へとはしてくれよといふに新平まかり出て是はしたり又九郎様
 御肥満めでたう存まするかしは木もつ付る先にかゝりませうと申されままするまづこなたへ
 と座敷へ通せばまびのるが心へてそれ火鉢にたばこぼんどもてなす内かしの木も立出んと
 するを親父法眼まづまて身が看經仕廻ふてからとことばをかけ懸じて法眼看經といつは三
 世の諸佛を一跡々々よび出し奉り中へ急成間にあふ事にあらずかしの木もきのさくなが
 ら万事たのみにしてかゝつて居る事なれば又九郎様へちやあびませいけたいくつながら
 もはちやたまたますされよといかさま一時ばかりもまたせければ又九郎もしびりをさらせ手
 をたさきてさうなる事と申てくりやれと喜八に頼むゆへかしの木あたまをかくりや法眼や
 う／＼看經をしまひ身がかたにかゝり居れば何事も身が心したい國もとのなじみやとて
 男に出おはせ名さかゝ立ては法眼が一分まですたる身もちか付成申さんとかしは木打つ
 れ座敷へ出ればたがひのあいさつ事終て又九郎申けるは昨日六條のけいせい町にてわか殿
 七三殿を見つげそのうへ新四郎といふ男だて津の字太の字の極印の金子をもつて瀬川をう
 け出さんとの義は五郎四郎殿をころせし勘太郎がゆくゑのせんぎとなるかゝりと身共はさ
 つそく檢断所へことばり大五郎の松の木へのぼり様子をかゝひ申されまにいさゝか間違
 ありて大五郎そのぼをにげさり申されたる跡へそれがしまかりこしたれどもいつの間に極
 印かはりし小印とすりかへ新四郎といふ男だてもぬすかへつてそれがまがやまりと成た
 る所まかり歸り大五郎にさけば新四郎といひしと日坂上人といふ出家にて八鹽村坂東寺の
 住持のよしまかれは勘太郎はけつして右の寺あかくれ居るにまぎれなし此方よりむかふて
 から先取はやまされども五郎四郎殿のかたささうたせて進せたくわさくたしらせ申す拙
 者も人敷をぬしつれ後づめのため見へずかくれに参つて進せる心何とさつひ心中ではござ

標もさぞにくたびれなされつらんけふもにぼしをたしむたる事はござりませなんだかごとへ
 ば供の新平東寺九條の方より鳥羽へかゝり歸りみちに六條の契情町へ参りましたればきの
 ふ金屋と申おびやふ大もめがござつて津の字太の字の極印ある小判三千兩にて瀬川と云契
 情をうけいやく其小判にその様な極印はなかつたがと口づのうはさ一決いたしませぬさ
 りせん途中にても奥様へ申上する通わたくしは今晚又契情町へ入こみどくと聞さだめた
 うござりまするといふ所に表より案内して濱松又九郎でござるこれにかゝつてござるかし
 い木殿へ急にたれめにかゝりた事あつて参つたどの口上音八がきもりちらして皆までいば
 ぬに國もとをいでし時路金をかして下され何か懸にあづかりまねかたちよとたれめにかゝ
 らずばなるまひまづ表座敷へとはしてくれよといふに新平まかり出て是はしたり又九郎様
 御肥満めでたう存まするかしは木もつ付る先にかゝりませうと申されままするまづこなたへ
 と座敷へ通せばまびのるが心へてそれ火鉢にたばこぼんどもてなす内かしの木も立出んと
 するを親父法眼まづまて身が看經仕廻ふてからとことばをかけ懸じて法眼看經といつは三
 世の諸佛を一跡々々よび出し奉り中へ急成間にあふ事にあらずかしの木もきのさくなが
 ら万事たのみにしてかゝつて居る事なれば又九郎様へちやあびませいけたいくつながら
 もはちやたまたますされよといかさま一時ばかりもまたせければ又九郎もしびりをさらせ手
 をたさきてさうなる事と申てくりやれと喜八に頼むゆへかしの木あたまをかくりや法眼や
 う／＼看經をしまひ身がかたにかゝり居れば何事も身が心したい國もとのなじみやとて
 男に出おはせ名さかゝ立ては法眼が一分まですたる身もちか付成申さんとかしは木打つ
 れ座敷へ出ればたがひのあいさつ事終て又九郎申けるは昨日六條のけいせい町にてわか殿
 七三殿を見つげそのうへ新四郎といふ男だて津の字太の字の極印の金子をもつて瀬川をう
 け出さんとの義は五郎四郎殿をころせし勘太郎がゆくゑのせんぎとなるかゝりと身共はさ
 つそく檢断所へことばり大五郎の松の木へのぼり様子をかゝひ申されまにいさゝか間違
 ありて大五郎そのぼをにげさり申されたる跡へそれがしまかりこしたれどもいつの間に極
 印かはりし小印とすりかへ新四郎といふ男だてもぬすかへつてそれがまがやまりと成た
 る所まかり歸り大五郎にさけば新四郎といひしと日坂上人といふ出家にて八鹽村坂東寺の
 住持のよしまかれは勘太郎はけつして右の寺あかくれ居るにまぎれなし此方よりむかふて
 から先取はやまされども五郎四郎殿のかたささうたせて進せたくわさくたしらせ申す拙
 者も人敷をぬしつれ後づめのため見へずかくれに参つて進せる心何とさつひ心中ではござ

らぬか相手の手さ、なれば新平にあらざるにさせてからそばへたよりなされぬならず怪我して下されなと懸を底にふくみたるいひまはしかし、木は夫の敵をうつといふうれしに、向事も心つかすかたじけなうこそとさりませぬ御しんていむすればいたしませぬとやうにうけ給て門では半刻もまたれませぬ新平さの用意せい兄弟の子さものくごはよひかど納戸へかけ入はち巻して大小なきなたかのくしく出たてば叔父法眼まづまでとれししづめてとまの暦とつてこいと取よせよ、正月廿三日上段はあやぶ中段は、方くれあやぶとは危さ事十方ぐれと涙の雨かたさ討に出しては身が氣が、りよ、あすは廿四日うしの日長びめてはさのさく明後日は廿五日血忌かたさ打に血を見まいといひこれまじ是も氣が、り上段よせれば下段あしく下段よければ中段あしよと十二月までくつて見ても此日かたさ討よじといふ事まづ當年の暦に見へねば來年の暦の出るまでまつたもよかろう一成就日なきにたとつたさを出めよてもつてとどすが心得ならん此法眼がかくまうからとあぶない事させては分りたもその長刀こなたへとれつどりのいまださりはせねどもかたさを此刃にかきとせしむれば此長刀に血を催したるけがれあり井戸へたろしてさよめをなせよ、

清淨なる耳が血をぬへす事聞てけがれた鹽水もてこむ耳あらはん又九郎殿それにとされど

いらんとするそこをひかへて姪のかしこ木申れち樵夫五郎四郎かたさをうたんだめにこそたまへとたのみか、り人とは成しにあらすや武士の家でとれやや夫をうたれながらこしがぬけてかたさもまうたぬそこそけがらはしきしんていとこそ申せかたさをうちにくに日おらのよしわしがござる物かたまへの事はいにしへの鬼一法眼の傳をもつて軍備劍術の名かくれなく西國までもさこへしゆへわざくたのみにしてのぼりましたに半時もはやくかたさをうたせて下されうといふれ心はなく又九郎様の聞てござるまへもさの毒なかたさ打とはけがららしいとはあんまりなつくぶんいく野幸太郎さあれじや大方敵の有家までまれか、つたる不成就日所じやないこ、にか、つてゐるによつてのむだこと高でこ、にぬぬとさへ思へばすむといへば法眼は佛供時じや人にかまはさぬ身が信心も佛供にも二時はか、る又九郎殿その内れ先にかくるべしかし木叔父がわるい事はいいぬことしうたさ終ば來年もし來年がすぎたらば六七年の内それも過たらば來世でいうけあふてうたせんと與の一年間へ入ければ又九郎もあされはて、してかしの木殿にはこ、もとを出ていつかたにどうも

うなさる、心どといれてはて三條五條のはたごやに成ともと皆まできかす身がつ先所に一間よけいもあればはるんりよなしにさ多同道といふ所へ行くより法眼女房しげのゐ出て

景にもあまびましたに又九郎頼にはまづ罷かへり一たんかくまひか。られては中へ手ばなまて外へやらふとは中されぬが法眼意地をござりまするせひかたきうたせまいとの心ならば毎日鳥追にやつして出なざる、をとめすには置れすまい心をたとま付て今一度法眼殿と御相談なされて見さつしやんせといふ内へ又九郎はしほくとしてかへりける

◎千町や万町のほうびのやくそく

深き淵は魚籠もてにあらはれず浅き瀬は流石人の眼にさへざる智に三智あり良知是を統とかや澤村法眼煙のかまは木を佛間へまねき身が日比信心まてそなへの膳も手づからたてまつる佛を改に罷がませなん三世利益の誓ふかければかたきをうつ守とも成べしふたりの子共新平もちかくへよりて結縁せよと佛だんの錠にしわけ斗帳八字にわけられければ佛だんの内よりかこの間へとゆる様に仕かけ台のふすまさつとひらきぬつと出るは日比ねらふかたき四日市勘太郎なりかしは木は刀に取ればこそ叔父御の心今こそしれたれかたの勘太郎をかくさい置られしをかへり打にさせんどのたくみかふたりの子ども新平ゆたんずなまのつえよれば姉のいくの弟の幸太郎左右よりたやのかたきやらぬといへば新平は主のかたきのがさぬとさつばまはしてれとよるを勘太郎佛壇の内より大小なげたまつた

く手むかふ心はござらぬわれら儀わか殿のた爲にせひなくそもどの罷つれあひ五郎四郎殿をころし三千兩といふ金子をうばひ取しもしや平九郎頼へ瀬川をうけ出さして若殿様つまつたれ心で自滅なされまい物でもないしかれば五郎四郎殿はてられても日か殿様へ忠のひとつなるさいこそその金子を持せてのぼり是なる法眼殿はあいなづけのさくら山邊方へゑんある人ゆへひとへにたのし身共がかけをかくし若どう草履取入鹽村にかくしれさすなはち法眼殿の頼寺日坂上人を男だてにまてくる日へ入こそませし所金子のこくるんより事むづかしく成べきを櫻山家の家老神原老藏殿はからひにてそのぼしゆびよく瀬川のわか殿様のれ手に入わか殿様もろ共櫻山家へ罷入しかるうへはそもどたちに名のりあひかたき打る、はつをけれども悪人はびこりわか殿のたをかたすくなければ何とぞわか殿様を御世に出すまでとふと法眼殿にせ日に成りかやうにかくれすむ所にかしは木殿は法眼殿の姪御とてこしもとへかへりに罷出毎日鳥に成て町ををねらいありかるし跡にて法眼殿めいむこともまらずころし申せまうへ引あはせてをいこの本望たつせさせて下されよとのぞめどもひさくたより無姪が身のうへ赤坂五郎四郎といふ夫の名もかつてしらす然るにかしは木がめいでござるとたづね來りしゆへかくまふてのうへあたきの名を聞てびつ

く今さう疑がみかたして先へかくまひし武士をうたせては法眼がたしぬとの儀それゆへ
 こなたのひとり出ておかつしやる様に生れもつかぬいろくの癖をこしらへ磨みてか
 たきをうてなき、あられもない指引は皆某がまへの義理をたてられての事若殿の御せんと
 の見どいけたけれどもおぢこの義理につまされせひ對面とねがひまかりいでたさわトんと
 やうにそれがしがくび打て本望をたつせられよ本より佛だんにこもりまかりあれば生たる
 身と存せすいそ愛をなされよと下へとびあり首筋のかみおしはらへばのしは木は始終
 を聞ましては何ともれうらみ申されぬ次第なれども此頃わけくれ神やほどけにねがひをか
 け奉り何とぞかたきをうたせて下されよといとけなきふたりの子さまでがねてもよめて
 もかゝさまかたきかはやううちたいとなびさし心合更ひるがへされぬ所是非にたよひませ
 ぬかくごなされて下されと刀をぬけば法眼とびかゝり刀をばひとり惣てかたき打といふ
 は相手も刀をぬきたらあふて勝負をしてこそ手からともいふべけれ何ぞや大小をなげすて
 かくこの絆是を打て本望にならふとれもふかそのうへ澤むら法眼が一たん勘太郎をかくま
 ひたれどもめいの愛にひかれ手引してうたせたと沙汰につてはたしすその方わが方には
 しをさてこかたきがうたされぬゆへ終に仕つけもせぬいろくのくせをこしらへその方が

まよせん役にたしぬ叔父と見かきつて出てゆく爲の心づかひはて外に在て敵ちうつふんは
 此法眼にさしかまふ事なしとさいせんのごとくに申せし所夕飯を勘太郎殿へ進せんと佛供
 と号し手づから佛だんへ入たる所勘太郎殿さきほさよりの様子をかかれその又九郎方へと
 てかまひ木殿のごさる事は御無用赤坂五郎四郎の妻になられぬ以前より又九郎懸したひ申
 沙汰家中にかくれなしまかれせばつかくそれがしもつゐにはうたれんとれもふかしの木殿
 に不義の悪名たちてはうたる、それがしまでが犬死になるまいものでもなひせひだし今た
 いめんいたしてうたれ申さんとの儀さまととめても得心なきゆへ女共申付て又九郎を
 かへしその方をよび入たりわか殿七三郎殿世に出られしうへ此法眼がうけあふてうた
 せうそれゆへ此よでうたさずば來世とまではいふた此叔父法眼が心をくみ日け若殿出世
 までまつてくれよといりわけをくこしくのべければせきにせいたるかしは木も道埋にしは
 れいかさま又九郎殿の心づけの任標とせばのひつとなしにいやらまゝい事のさこへたるいそ
 れゆへなるかその所まで氣をつけていふて下さんず勘太郎様のまこと何のうたがひ申ませ
 うもからばはか殿七三郎様世に出なさるゝ道はたがさましかと勘太郎殿はたまへにあつ
 けまじとぞおぼせといはれたまへの段をよないちぎにぶつたんたをめをさ穴道をつけて若

殿の方へもかよはせすたとへ途中で見たりとも此法眼が詞をのけぬ内はことばかける事
 ならぬとことばの鎖をわろせば只わいと涙ぐむを勘太郎はよく御得心有て忝い若殿さ
 まだに御世に出しなば弓矢八まんかけてうたれ申さうと一禮いふ所へおもての方さしめい
 て大松左京大夫たいまつさやまのたひよなく方の御舍弟桑名平九郎殿しやうやくわでござる法眼殿ほっけんまたちかづきではなけれ
 もぢきに先まづに掛りたくれつゝけ是へ見へますると袋井大五郎上下ふくろいためつけて案内あんないすれ
 ばそれまず勘太郎殿を佛だんへいれよとのさはぎ鎖びんどるま法眼出むかひ是は思ひも
 よらぬ粉まづこなたへと請すれば幸名平九郎上座しやうなへとをり大五郎つぎの間まにうやまひかし
 こまるとき平九郎ことばをかけ、うけ給はり及びし澤村法眼さわむらのとはこなたの事よな聞
 もれよばれつらん大松の家たいまつの數代の大家たいかなるに世つぎ七三郎色しちさんしきにふけりし大だわけ親左京
 大夫勘當かんだうめされせひなく此平九郎がねさめねはならぬ程に成たり何ともめいどく千万せんばんなれ
 どもかゝればつながると迷惑めいわくながら向後かきさは國の守まもりまかりなるそれにつさちと内談ないだんいたし
 たき事あつてまかりこした外の事でもないさくら山三位殿やまさんいのそく女花づま姫七三郎むすめしちさんとの
 むひなづけとして七三郎を櫻山殿へよび入れられたるよしとても世になき七三郎と申ことに
 さやつはけいせい瀬川せがわにはだされ筋すぢなき好色かうしきのためけものなれば一刻いっぴくもはやくたひ出され
 花づま姫と拙者方へ下され夫婦中ふうふちゆうよく國をねさめなばさくら山殿のためにもまかり成此
 事よろしく取はからひぬはらばそこもどへも永く年としこと國方くにかたの俵子はたこ貳千俵にせんばらづし進すすじ申さ
 んそのうへ大松の家たいまつと申と先祖御所の五郎九秀鏡ごろうくしゅうきやうより代たいりの寶物たからもの邪佛よこぼ九といふ九寸五分の
 鏡きやう是を以て綱目の参内さんないをもつとめきたるものなるに七三郎立たちてより右のくわいけんゆ
 きがたえれず七三郎のためけものよもや是を取てのく程ほどの思慮しりゆはござるまいとぞ存れども
 さしめなつて是がなければ拙者家國せつしやいこくにを丸まるごりにしてもつぎめが相かなとぬさくら山殿のそ
 く女むすめをだに申入れてもござらばさくら山殿やまれとりなしをもつて右の寶たからのいづる迄寶物たからものなし
 に参内さんないいたま度のぞこひとへに貴殿きでんのねはたらきたのこもると手をつかへてのべにける

○寶の行衛たからにつまる悪人の鑑あきら

機はりによつて行ゆふ時は其圖そのずにあたらすといふ事なし勢いきほに乗してなぞときこそその思ひかならず
 とびんと范増はんぞうが項王こうわうをいさめもことばにさる事ことかじ幾億いくおくの人をか吞のへき鯨鯢けいせいもわづか
 の人ひとにくるしめらるゝはそのはかりことあるがゆへなり末座はつざにひかへし大五郎おほいつらさあ法眼

殿平九郎たいせつ機はり大切たいせつの儀ぎ仰出おほいされたからといやと有ても味方みかたとするれうと有ても血判けつはんさすか
 わ此この一味いまい連判狀れんはんじやうに名なをまると血判けつはんいたさるゝしもし異儀いぎにたよと此方このかたの大事だいじなる故血判

のかかりに一命を申うくるなんどくとつたよれば法眼ふつとたつてのうけがらはまの血判とや血の事はさくさへ禁物長壽いたさん爲に朝夕たべたい物もひかへ第一此法眼四字ならび四角といふもよかきいひせ親類もよんるいと申程の拙者一命の御相談ならばまづよまにいたしたいそのわか殿の名七三郎殿と申此七の字も口に申すがきがうりかねて傍聞もなされつらめさくら山殿の目たくしの乳兄弟そのお姫を七の字のつむたむことさのどくに存せしが平九郎様伊所望といさいわぬいかにも世話申さんがさくら山殿はむこゑらびの滑長此たび七三郎殿をよびいれたかれし事まつたく聲にせうといふ事はかりにあらず申てもさくら山がむこといしなつげある男が紙衣ひとへにていづれに心のとまるを見とぎけいよく瀬川にふかく姫にうとさこころなれば何がさてほいまくつてのけるは親のつね家老原海老藏と心をあてせての義そのうへはさくら山殿心しだ此はうげんにたむてゆえいさかゆだんはいたすまじといへば平九郎よろこび聞ふよびし血ぎらひいかさその心なれば血判に及ばずまかし法眼の底意の見ゆるまで何とぞわれなる大五郎をさくら山殿伊殿へのびこませあわよくば七三郎を打て取こなたの心庭をも聞とけさせたいとの望それはさまでにふばまめさば平九郎様よりたのみの嶋盛をつかはされその内へ

大五郎殿を仕こも又九郎殿でもれ使者に成れいやでもれうでもれ姫をもらひ度と仰つかはさるべしそれがしその場に居わはせまことをつくして取もつ心庭を見とけ給へといへば平九郎いやく使わざにては心もどない一通々は使にてまたたいを送りよき時分に身をも仕かけてさくら山殿の返事したいにたして姫をうばひかへらんと儀是は御尤に存るしからば明日五つごろわれへ御使者遣さるべしとふ折ふま濱松又九郎すたくいふてかけつけ平九郎様是にござりまする四日市勘太郎は八鹽村にかくれると承りし故あしがる五十八人めしつればせ向ひましてござれば勘太郎は居合申す若どう新五郎さうりとり十三郎を見付出てからめとらんといたせし所思ひの外の強力共にてめまつれたる者十八人矢庭にさりとたをされのこるもの共ちりくに成申故わたくしも命をすて、こたらかんどは存じたれ共若相はて、は五郎四郎後家かしは木うしろみして敵をうたせてやる者なくさぞ力をたせされませうと御らんの通に肥ふどりましたれば走るにこの外太歳ながら一まづ是まで逃のひましたはあつはれ手からではござりませぬかとすらくいへば平九郎もさのどくに候にてそれしきの事何時もめしとらる、義たどへさやつ等に翼はへたり共平九郎らがいさほひをもつてからめとらぬといふ事はあるまじそれよりさしあつてその方々明日さく

ら山殿への使者申付ねばならぬ法眼殿いさま申すと大五郎又九郎めまつれてこそ歸りけるを法眼はるかに見ねくるに又九郎はいかゞ申なしけん二三町行と見へて取てがへしかし木殿にあいたいといひこめ共最前わけを聞たる故頭痛がいたしますれば今日とあためにかゝらぬどの口上いやさうな用事わけは敵うち的事と申込ども今日は日柄もあしき由おぢぎ申さるる段尤に存れば二三日の内に能出なされませいと新平が申て出るを大きにふくれ誰が爲に此様にあたふたせしむる事ぞいとしや此中の心のも先で頭痛がさる物であらんちどもみやばらげて進上れそらく乗物につて歩針たてよりは針も上手國もどよと金子這進せて心をつくす武士のなさけ今さらさしよくのわるひと開て見すてふたしては世上がらも又九郎のよてもたのもしうないれとこと沙汰に逢も迷惑せひく容身伺ふて歸らんと新平にかまのす立關の障子押わけ座敷へ通れ共人音なき故納戸の方をそつどのどひて見れば夜具引散まよくくの頭痛や綿ぼうし深くかぶり金糸交りのすぬひの小袖しだけなく打臥たる躰又あつた物ではな法眼は何方に居るゝとさし足して納戸へ忍びけるに雨戸大方にしめて苦しむ躰いとしやと寄そひ頼もせぬ腰をひねり脊をさそり足をさする段になつて扱も見かけに似合ぬ足の毛の太さと呆れながら日比の思ひよもや推なき事は有まじ

と抱き付を忝い思召かはゆがつて下さんせやと綿ぼうしとれば音八なりさしもの又九郎もびつくり仰天うろたへ廻つて許せくと表へ出るを君さん夫は聞へぬとすがり止るをつまとなし扱は我戀を覺り法眼諸共に我をなぶりしよな此返報には敵勘太郎を召捕かまへ木に本望は違せさせまじとつぶやき出る元より勘太郎と此内に有は何れも大笑ひに成を又九郎は門外へ出ながらなぶつた上に嘲り笑ふかと彌々眞意を燃し立歸ると否や門をしめくわんぬき入させ高塀の上かかしの木法眼兩人是くと聲をかけかは木は國元にて借用したる三十兩只今おぢさか申うけて返辨致せばそこの恩なし利足にても添て進し申す皆なれ共それだけは音八が花代此金受取てとつとにわかへりなされと三十兩づゝみをしたへなげつけた所が暮く日ちくく

歳徳五葉松三之卷終 第四卷

◎大嶋盛の内氣な姫の玉琴

正月をむつさといへるもむつまし月どの心にて親屬たがひによりあつまりてむつさしき月の中半もすさ殊に大宮人の春は民俗より勝れたる心地して所勞をも歡樂といひ物事神よ

敷延喜神祇式の外なる忌詞もれなく祝ひことよく家も時めく花さかりさくら山三位の郷の
 御殿へ案内して大松家のあどめ桑名平九郎たゞ今は大松を名のり使者として濱松又九郎敷
 々の音物五荷五種のかさりたて別しては廿八してもかきかぬる大島壺人とひとしき人形一
 ツ大黒舞に仕たて松竹鶴龜のあいしらひ金銀をつくし座敷へなをしれた取次たのみ人といふ
 内平九郎は供の人數にまじり鎗持と成て中門にぞひかへめたりける取次のもの此よし申入
 るるによりやあら心得ずや音物のかすく婚禮たのみの仕立にして申入らる、段さつくわ
 い千万と家老神原海老藏がいかる聲もれ聞ゆるを澤村法眼聲としてとても世になき七三郎
 殿をかばられずとも平九郎殿へたどりむすびあるこそ御家のためなれとさまくせいする
 詞もふをまひとへにてもれける内神原海老藏花やか成小袖上下にて立いで大松様よりの御
 使者御口上つまびらかに承知仕らんといへば又九郎殿をぬき大松平九郎申すするは當御殿
 の花づま姫様ひつきやう大松家の家督へとの御いひ名付でござればばまくらられて世にな
 き七三郎へにかまひなく平九郎様へ御興入ある儀に願ひ奉りすなはちあらためて結納の目
 録かくのごとくでござると目錄をわたせば海老藏ひらくに及ばず先達て御やくそく申せし
 むこ君は七三郎様なれ共主人三位この外娘かはゆかりにて一たん七三郎様をよびいれけ

いせい瀬川と共にさしれた花づま姫へふかく心をよせらる、か瀬川へふかく心のなつとは
 なれぬかを見てはよくけいせいになづむ心ふかしと見きわめなば七三郎様とは花づま姫
 をそはし申さぬつもりさあれば平九郎様へ御縁があるまひ物でもござらぬともそのわけた
 しぬ内にかにもどたのみの品々うけとるもきのさく又七三郎様とふゑんなる時は此たの
 ん返すも残念それゆへ目には拜見いたさず巻のまゝ海老藏があづかり申す只今主人三位殿
 神拜のみざりなれば事すみあらまじお申さかさん御返事の後刻御出先記歸りあられ然るべ
 く存まするといふに尤どうけてたがひに式盛し海老藏はたへ目錄たづさへ賜意に目をつ
 けて入ければ又九郎はたもてへいづる躰にて平九郎を招き供廻りを返し兩人共椽の下へし
 のひ入てぞ見おはせける去年咲てけさ猶句ふ梅花翠簾の追風春なれや釣殿の玉障子さつと
 明さて琴をひかへ花づま姫は爪かけながら是瀬川とのふしぎの縁めて一所の住居こなたゆ
 へにわか殿様みづからとの祝言もれそなほりあり標はうらみたるがたがひの心うちとけて
 今は中よく若殿様をふたりしていとしがるやくそくなれども父の三位様物がたくわか殿様
 のれ心といくるまでとまくらそかどさする事ならぬとの御事しんさなといふて此うへのし
 んさな事は又もあるまいとの給へば瀬川はお氣遣おそばしませするなれまへのれ心さしたた

けはわたくしがわか殿様へよう申こんで置きましたればねつつけめでたう御しうげん遊ば
 しわたくしはねまへに免しつかければねまへのあなさけて折々若殿様のためにさへか、
 ればようござんずんとりんさしつどの心なくはかりながら打どけてわか殿さまをいど
 しがりませ扱はそなたもそうねもふてかどかく此うへいふたりの身はひとりも同じ事心を
 ひとつにしてわか殿様のね氣もそむかぬ様あしやままた寒さのこりしに障子をさし
 中よく琴さみせんてたのしむまいかそれがようござりませうと瀬川はちねつとり障子を
 さし調子をはせてとづからとこなたどわか殿様をいねては三つのほしはなれぬやうにどね
 しめよき琴さみせんにうかれいづる七三郎さいせんより物かげに立ぎしせしがふたりが中
 よきてうしを感じじつと聞るともしらかみの障子の内に障りあけ世のうさは戀どぎ
 りどにまかす身のなにはの梅のみはへより都の風にちるこのとくもるにちかきわがつか
 めんのされめのふぢばかまゑく此うたはうたふまいものゑんのされめとは何事そさの獅子
 ねぢりと引あらたむるつり殿の下にさしより七三郎さし足して次の間へ出中よさへだてな
 き心をたがひにひかばせしはまことしけなれ共ふしぎや琴に殺伐の金調あられ六の糸
 しつみてさこへしは六は坎の卦陰氣のたゞ中陰のしづむとなげさをこめたる爪音とてがて

んのゆかぬ事よなその上さみせん三のてうしまさりに高ぶる三は離の卦にして火なりこ
 とばにはまきをなせ共なじとをかさねし瀬川がむねのほむらの火の自然と調子にあらはれ
 しか姫のそこ心にとあの瀬川ならばわれひとりそはん物をど心のれくをあはせしは天地
 の音調哥こそねはさに三つのほしゑんのされれの藤ばかりあれ歌の末はういたもどをすみ
 ぞめにそ免てかひなきうさ身ぞやさうじやわれ大松家の嫡子と生れながら家國の事に心を
 もちぬす契情にみだれ親とのひなづけの姫をさらひ今櫻山殿のなさけにて姫も瀬川
 も一所にさしをかれそれがしまでかくまいをかれたる故ふたりの女心をやいらげ中よさか
 どねもへはひさけの氷の湯と成しためしねのづから琴さみせんてうしにあらわれしかは
 ハア是非もなやとあられるにさみせんのうしをなをして今さくら花に目がくれてど
 うたひかくるをまことお女の心はその根ふかくその眞意やむ事なしと佛のときにかれしも
 今ねもひわたつたりなじみの瀬川をそとへ姫ともそはれずいゝ名付の姫をすて瀬川とそ
 はばいよくもつておやへの不孝をうじやな是までなりとひとりこといふてたぶさふつ、
 ど切すてゆくゑもしれずのがれ出ぬへば様の下なる平九郎又九郎ぬつと出て七三郎國遠
 の上はもとや心にかゝる所なしと上にあがり海老藏殿へためにかゝりたいとの高聲海老藏



法げん打つれ出れば釣殿には何の氣もつかぬにやいよく琴さみせんれもしらく引おはせ
 三下りたもろしくつま音け高く撥音巧者に聞ゆるに平九郎まのぼせれたる家來をまねさ
 上下のしめあ着かへ七三郎と兩人の女のまつとのてうしをかながへは見られよたぶさぞこ
 いに切きておくもなく成たり此うへははよく花づま姫はこの平九郎方へやうくるとい
 へば海老藏ひたぬにまこよせ琴をみせん所じやないわか殿の立のかせぬふとよばるにぞ
 姫も瀬川もまろびをりノウかなまやまが殿様よび反してとばかりにてさらに正躰なかりけ
 り法眼一間へいりわたらしき三方に眼鏡をのせ出さくら山 位殿は禁裏に御用ありてわか
 へりなされがたく是によりて此眼鏡は三位殿の御めがね是を御家老海老藏へ相わたし此め
 がねをかくればすなはち三位殿も同前もしや七三郎むこにしがたき時は必ず平九郎殿には
 かざらぬ男からと智略を見たて姫が夫とさだむべまど仰てされたさあへ海老藏殿是をか
 けて三位殿になりかはりむこさだめをなされよとぞわたしける

◎大黒に袋井とは相應な出たち

そもく大黒といふは我朝の人でなしまかだ國の人なればせいがちつくりひくふて色が
 ちつと黒うても福の神といふ名によつて三千世界に是をうやまふ是三位の卿の御をがねか

けたれば神原海老藏ではないすなはちさくら山の三位花づま姫家國をうしなはんとする七
 三郎は貧乏神といふ者しかしながら七三郎に縁組ぬからは平九郎へときめてもくみがた
 し大松家の家中の内智慧たけたる者むこに取たしその子細といへばたとへ平九郎にても
 七三郎にても何はさもが、れてもつぎめの参内かなはぬは家の寶邪佛九の懐劔七三郎身も
 ち放埒と見ながら是を取まのしてもれかざるはたれにてもむこにまがたし是をぬすみれさ
 するといふ時の用に立んとすること軍器とも武略とも家國をたもつべき才智の名將此儀あ
 付きのふ迄の悪事之此三位が中なだめ右の寶をだわかくし置たる物わらば花づま姫がむこ
 とし大松家さうぞくの事は三位が大内へ中上てさつそくに家國のあるじとせん何と平九郎
 にはその寶を持ってむこにならんと望かどとこれさしもの平九郎もうちくしてその寶は
 五年いせん何ものともしれず寶藏へまのび入ぬすみ取てゆきがたしれず今にても是を持た
 る者ぬす人ならずや其ぬす人をむこにして大松の家をつがさんとはその意得ぬ一言とい
 とせもはてず法眼はさあまからばその寶なしにつぎめの参内がなるかして見られよまかれ
 ば一たんは悪心にてぬすても今日大松の家のたつ様にさへすれば悪心かへつて忠義とな
 る七三郎出家めされたるうへは高でいつれとても跡をつぐべき筋目でなし寶をかくし置た

る程の智略の人をむこに取てそのたからをもたせつぎめの参内は三位の郷のねとりも平九郎殿無益なること申されまいとのめかけられ平九郎の父九郎と顔見合せエ、無念といふより外の事どなき時にかざりたさし嶋盛のうへなる大黒面を取て下へたれば袋井大五郎なりとても七三郎殿身持にて大松の家につかれまじと五年己前七月十三日かみなり煩りにいなびかりつよきまぎれにそれなる父九郎と玄ぬしあはせ寶藏へしつひを邪佛死のくわいけんをぬすみどり本國へさし下し父袋井三甫右門にわたしたき日さき平九郎殿に思心をすしめ何ぞぞ平九殿に七三殿をころさせその時こそ主君のかたきとほわかほ忠義をたてかけ平九郎殿をせめほろぼしなば大殿左京太夫様にも一たん御勘當あつても親子の恩愛にひかれでかまたとあつてゆだねなされんすさまを見あひせ家國をむづられずば寶物を火にやきすてんどつめかけておまて家督とならばやどの國元の父三甫右衛門と心をあひせ一國はことごとく一味させ置たりた、今海老藏殿のことばのすなはち三位の郷の詞寛仁大度のかさばさかんじ入てござる今日の様子いかと嶋だいのつてさう屈なるめをいたまたも有様と花づま姫をいつぞや祇園にて見そめはれてく身も世もあらぬ所を平九郎殿へかづけてぬれ手にて栗つかむとかりことなんど大松の家相續の参内が成ませうがなといふ

を平九郎とびか、つて取てふせば又九郎にげ出すを海老藏まつたうとくまいと聲かくるにふるひながら立もせず居もせずその内に平九郎大音あげてヤイねはたはけめうぬにそれ白狀させうばかりであつた大殿は御病身なり京都に長づめのふつと免の内七三郎殿身もち放しきのおくおれもふ折ふし五年いせん寶もつふんじつれ家にたれあつてまとの忠義をみがくものも見へぬ所にその方がしきりに身にむはんを進むるヤレがてんのゆかぬ儀ぞの思ひながら是こそ寶物をたづねいだす手がしりとれもひむかしより後のみだいの弟はかた家國をのぞむ格なるもへじとそれ成てそれなる法眼殿も下地より内通して置ながら昨日とせめてのたい先んどの方に見せかけ海老藏へだんく熟談させと若殿七三郎殿遊世のていにさせたるもたのれが此むねの内をさぐらんだ免若殿にはされにござるぞとふにもう出てもよいかのどかみ切られた跡もなくたより出ぬひそなた衆のさまづに任せ便にも瀬川にもさせん琴の役をたのみよはせとやしかたの入るばかりととそへがみさせて切たれども蒸門から入て髪はゆひなをさせた瀬川も姫も思ひの外はやま方ができたあのくらゐでの石橋でもむけんの鐘でも出来かねぬ大五郎もなかく、疊の上でたいくつおもあらふにかはひそうにはやう首うつてやられとのぬふにぞ大五郎はがみをなし口れしや扱はみな

一所に成て身をよかみへつれてよせたかよしくたとへ此身はうたる共家國にのぶを
 かけし一念たれになり共取つてたもひをばらさでたのうかそのうへ邪佛丸のくわいけん
 の國元へくだしたければ身が一念をもつ火あんどなし七三郎に参内のさせまいさむよつてく
 びうてといふをこまことしやべるまいと平九郎刀をぬくに及ばず兩手をくびに付けてしめ
 ころせば七てん八とうもがさくるしみ血をはきたをると見へるがむなもどより一だん
 の火の玉ぬけ出こくうをさしてぞとびゆさける海老藏は又九郎に繩かけこいつは後日の証
 人にたすけ置べしとかく此よま左京様へや上さうく國もとへうつてを下さし然るべしと
 いふ所へ法眼宿より急川とて奥方の多法眼ひらき見てびつくりし懐中せられしはいか成事
 共しれがたしさらばわか殿様へいまづ上座へとれし直し改めて侍言のたさかつき三方
 かばらけながえのてうしもち出れば千狀万歳をうたひかけ姫より盃をとりあげはづがし
 げにわか殿へさし給へばわか殿さかつき取わけ給ふを瀬川すつくと立てその土器はひとり
 みぢんにくだきエ、口れしやむねんやな姫と夫婦になり家國のあるじとならんとせし物を
 よしなきばかりことにのせられわが望みをさくへられしかはらたちや心うやど若殿にとり
 つくと海老藏引わけ扱は太五郎がさいこの一念瀬川にとりつささまたげをなすかよくびに

かけたる守袋も不動尊をとり出し南無大聖不動尊をやしきものしけを立させ給へとい
 たかす時瀬川は苦しむてい大かたならすかつばとふしてたさ上り夢見し心ちにぞ見へに
 けるとかく御祝言の奥のひと問眼法にこだんく御大儀先和歸りといへば桑名平九郎もま
 かり歸り國元へうつ手の用意いたすべしといとまをして歸りける

◎七つ長くの逗留客

金魚は觀たる所美なりといへども饌にあたらす風流花香をつくす女も夫にねくれて後家た
 つる内に懐妊し丹塗の矢をたづねざればすまぬ仕わはせればさに赤坂五郎四郎が後家かし
 は木みさは正しく鳥にひに成て出つけたる物か内にばかり居ては人の氣のまはる所いかゞ
 ど子共新平をつれて都のをわざどうかゞひわりさける法眼はさくら山殿へまいられし留
 主に女房おげのひ夫にかはりてかくまい置たる勘太郎を介抱し夕飯をすしめけるに何が血
 氣さかりの口か侍長々の佛だん住居心うとく精のつきにやこみわけて終になき顔色はなは
 だ氣色あしかりけれども家内へ氣づかひをかけたまじきと心あそまぬ膳にすはり箸をとりけ
 るが汁二口三口すひけるを吐くるめさ水ひとつこのことばが此世のいとま乞となりうんと
 そりけるよりかへらぬいのちとなりける人々是といへどもせんすべなくなしたしなとの人

参もどいかず百會の灸もしるしなくて世のみなならひくむしぱりたる齒のいとされは、
 てしをるさうくやらさうくやらまづ法眼殿へも多したく先ひそかにまらせすぐに佛間に
 じやりける所へかしは木にやこ新平が供してかへればしげののはあはて天にさうだんせぬ
 うちいふてよからうやらはわひでよからうやらしれぬ心のとつこれひつ氣をもむとはさら
 にしらすかしは木はうつさかたさをのばしれくもれちと法眼様のうけあひゆへ大勢のも
 の久々のおせじしげのの機へに禮申さう機もござりませぬといへば是こそあゝあらたま
 つたけあいたつたとへ千年でも御縁があればこそ是にもござりませぬその様に仰られ
 まするぞとえじやくするを置所より新平がさし出たり今四方でうけ給はりましたかさくら
 山三位様に大松家の悪人の侍せんがござつてわか殿七三郎様いよく花づま姫様を侍
 祝言なされめでたく伊世に御出どの儀それゆへさくら山様はこの外にさやかにてお肴持
 てゆくと鯛鴈鴨貳三荷になひつれてまいる道々のうはさは是が定なれば法眼様やくそく
 の通れふたりのれ子機がたの親侍のかたき打しは木さまも夫のかたきと御本望をどげな
 ざるに問となしといへばかしは木はさればの事みづからもその噂どほりがけお聞てもど
 つたもつともかく勘太郎殿は若殿様への忠義になされた事でもごんすればそれを心もなげ

にかたきとねらふはづはござんせぬともふたりの子さもせい人の後れやのかたきもうたさ
 ずにくれたかど此母をうらみんがさのどくその上いつぞや夫のかたきやのかたきとつめ
 かけたる時勘太郎殿大小なげだしくびさしのべてかくごなされたるをうたんと致せしにそ
 れは死人を切るもさうせんわか殿伊世にさへはだきたらば身がうけ合て尋常に太刀打させ
 て勝負をつけさせんときびしきうけあひゆへ今日まではノウ新平勝負をのばしをさざる
 所に勘太郎殿風さへひびつたひきなされずそく才にござるとうれしゆ事でもごんすといふ
 はさしげのぬこころもだつさこへ法眼様の歸らしやれぬがよいかたし歸らつしやるが
 よい道理か音入いどもにゆくはて道まで人がやりたいなどおせるに幸太郎とあね様と、機
 のかたきはいつの事でもござるといへばあねは今ささやるとほりわか殿さま伊世に伊出なさ
 れたどいのすれば今日明日のことであらふかくごまていやとぬさむる所へ常は達者にかち
 の往來いかゝまけるにや法眼のり物にうちのり中の口までかさなれさせ杖もてこのとやう
 く奥にどをればしげのぬもかしの木も氣まよくなあしきかどうかゝふを法眼あたり
 を見まはし女房共さいせんのみとくとよんださぞびつくりめされう是さかしわ木若殿七三
 郎様伊世にさへ出ぬふにさはまらば身が受あふてかたきうたさんとせきにせさこをとい先

れきしが悦べわか殿御世に世出の事はじめ大松の家の悪人袋井大五郎ころされぬ家の重寶のゆきがたもしれて世國へ人數さしくたさる、一段にまかり成たさかつきもて來い酒は無用てうしに水と一つうけて女房にせしものしげの心におぼへいたゞきかぬるばかりか何なく事があるぞ酒は憂をわさる、水と古人も申のこされたれば水さかつきが何のかなしひとこれなたへどうけ取てがしは木にさえて女房こ、へとよびつけそれ勘太郎殿の刀是へおいと立てさし出せばすかりとぬひてさわかきと木ふたりのこども五郎四郎を打た四日市勘太郎とてわが事勝負せんといふをたごるきたさまたまへ何事を仰られませうどうつくとばて此刀で五郎四郎を打たればちきには是で勝負するともへさもかしわ木がてんのかすまげのゆ様こりやまわ何事でもさんすと問ばさればの事させんより世咄申さんと存せしが夫のこ、ろいかゞとひかへておましてござんす何をかくしませう勘太郎殿は先刻頓死いたされそのわけをきにてはうけん殿へ申つかはし死骸はこれにと佛問ひらけばはつと驚くか「い木が詞もなみだにかきくるしを法眼は聲わら、げせみ共かたきうたせんと約束せし一言ひるがへさぬ此法眼さあよつて勝負せぬかといふにかしは木かつはとふしうけ合給ふも世家のため期をのばして本望とげぬはわれ」が運のつき頓死までのうけおひにたちは

なされぬそもや／＼れちてをかこりにうたるべきかど心もみだれかきくるれば法眼小袖にしはだぬぎ是見たか姪女房おぢめいの中でも義理はむつかしうけおひ憐し勘太郎頓死と聞てちきにくわいけんつきこみしはきものたばね此くわいけんをぬけば死ぬる死でいかたき打たるせんいあるまいさだめてその如く取みださんと思ひ法眼がたすからぬまゐるしの此腹おぢに犬死さする氣か幸太郎いく野こ／＼こゝろと左右へよびよせいやといふ手をもちそへさせくわいけんぐつとれしこみぬれば息もたへ／＼女房とすがりつめてなげ、共武道にせまるさいごとれもへばとむるにもどめがたなくより外の事ぞなきかして木はれちがもちたる刀を取てもどゞりはらひふたりの子共は澤村の家督にたのむわが身は是よりいかなる山のねくにも日け入出家堅固に夫やたぢのひととむらはんと立いつればくるしむ聲もよはりゆく虫のかれ／＼わはれげふ此世の夢をさましけり

歳徳五葉松卷之四終

第五卷

◎ひるふ水の火となる前表の鑑

それ天地の間に天合義合あり父子兄弟のたぐは天のあはせたる物なり君臣夫婦朋友のた

ぐのは一たび義を以て合ふその義關する時は始終まつたければ義によつ行はざる時其倫たちまちにみたるどかや袋井大五郎悪事露顯しころされたる様子いまだ國元へさこへずその二日前に六五郎が伊申こしたる書狀父三甫右衛門かたへ達し何とぞわの殿七三郎殿を平九郎にころさせ是を科おして平九郎をころし大殿を往生すくめにして家國を丸取にいたすにもいや間も有べからず候もとのまより第一なれば要害堅固に國境の御用心あるべしと申こえたるを見るる三甫右衛門大によろこび原小平次龜山廣右衛門同龍右衛門をまねき内談の上表向は平九郎に一味をたる分にて質は大五郎に家國をしてやらすたくみ時節こそ來れり就るに一家中は一味連判させをきぬれ共隣國御一家の家中に伏見彦三郎小田原門三郎平塚春三郎大津十藏地鯉剛半四郎二川鬼次沼津四郎太郎藤枝伊三郎前坂大吉とはじめおむつかしき者共多しどかく一家中連判の勢ぞろへをせばやと回文をもつてまねきければ兼て心をあはせたる人態には見付半三郎藤川次郎三石藥師平十郎荒井幸四郎嶋田惣三郎鳴見歌右工門大磯城右工門奥津國藏岡部大十郎掛川助五郎草津勘十郎水口十四郎をばはじめわれもくとかけきたり二心なくぞ見へにける三甫右工門大に悦び當家の重寶邪佛丸の一腰は但馬日記にものりたる名物此一腰なければつぎめの參内かなはずさるによつて大五郎智略をめぐらし五年以前ぬすみ出し身が方へさまこしたりすなはちわれにはこらをたてその内にいわるて免て時節をまつまかるに大五郎方よりの書通に日頃の本望を達せん事ひまどるべからずその用心いたせとの儀何と免でたき事ではござらぬかこれにより當家の重寶を味方の人々にあかませて安堵させんた免招き申たり廣右工門殿御大儀なかつ此鍵をもつてはこらの錠をわけ寶物を取いだし是へ持參あるべしかしこまつてござると鍵をうけとらんとするに三甫右工門錦の袋より鍵取いださ見て大きにたどろき刀とつて立おがりハ、はわ南無三寶われらるや子のもはんも是まで扱は運つきはてし都めて此事あらはれたるか口にしやむねんやなとはがみをなしじだんだんでいさぞわれれば龍右工門不審して見ればその鑰真赤にさびくきりしがもしそれをもつての齋にてはかよく工夫して御らんなさるべし鑰のにはかに鎖たるは當家の重寶邪佛丸につまでも此家をはなれず貴公御父子と家國のあると守らせ給ふ瑞相かふるめでたき伊事こそいとねといへども三甫右工門心うかずそれ錠と鑰とをやりの子のこどくしかるふ鑰にかにさびくさつたるはせがれが身のうへはれ心もとなや氣づかはしやな錠くされと錠の相圖心にまかせずいか成天のしらせなるぞむなさはぎや安からん事やとまはれとつれば廣右工門立あがつてなふむやくなる氣づかひそ

略をめぐらし五年以前ぬすみ出し身が方へさまこしたりすなはちわれにはこらをたてその内にいわるて免て時節をまつまかるに大五郎方よりの書通に日頃の本望を達せん事ひまどるべからずその用心いたせとの儀何と免でたき事ではござらぬかこれにより當家の重寶を味方の人々にあかませて安堵させんた免招き申たり廣右工門殿御大儀なかつ此鍵をもつてはこらの錠をわけ寶物を取いだし是へ持參あるべしかしこまつてござると鍵をうけとらんとするに三甫右工門錦の袋より鍵取いださ見て大きにたどろき刀とつて立おがりハ、はわ南無三寶われらるや子のもはんも是まで扱は運つきはてし都めて此事あらはれたるか口にしやむねんやなとはがみをなしじだんだんでいさぞわれれば龍右工門不審して見ればその鑰真赤にさびくきりしがもしそれをもつての齋にてはかよく工夫して御らんなさるべし鑰のにはかに鎖たるは當家の重寶邪佛丸につまでも此家をはなれず貴公御父子と家國のあると守らせ給ふ瑞相かふるめでたき伊事こそいとねといへども三甫右工門心うかずそれ錠と鑰とをやりの子のこどくしかるふ鑰にかにさびくさつたるはせがれが身のうへはれ心もとなや氣づかはしやな錠くされと錠の相圖心にまかせずいか成天のしらせなるぞむなさはぎや安からん事やとまはれとつれば廣右工門立あがつてなふむやくなる氣づかひそ

の鍵是へとうけ取いかさま此さひでは錠があくまい侍共大邊に水くんで來れ龍左工門此錠をその邊へつけて侍共に灰にてこがしせようけ給はると錠を水へ入れればふしぎやにわかになりひびきて水中よりけふり立のぼり火るん一だんもへ立ける内錠の湯と成ければ廣右工門龍左工門ありあふ人々こはげたちてまりこみする外のことなき三甫右工門いらつて錠と鏡を以て身がつくらせたる物なるあ水へいらば金生水の理あるべき所なきりにもゆる火もどろけたるは扱は火剋金とわが金氣の武勇のたくまかくれなきによりて都より火急に討手のくだるといふ前表か火剋金とわが論のまくるといふしらせわれ大惡不道としりながら一子大五郎を世にあらせたくむるんをくわだて寶物まで手に入たるにかゝる次第おなりくだる事エ、腹立やな邪佛丸のくだいけんは天下にかくれなき寶物是を持人の身のうへ吉凶禍福をつけしらすとはかねて聞しがさては非道のまはりといならざるかよくく此上の邪佛丸を火になげ大松家の寶をむなくせん都より討手下り是をわたしわの殿七三郎を世にいだすはねたましやいで錠ぬち割て寶をいださんとほこれにたちより鏡鎧とりよせ錠をた、さくだけば廣右工門龍右衛門戸びらをさつとひらさける時にもひもよらぬ殘聖の男大小よこたへくしり袴のそば取てまつ白なるいでたちたからの邪佛丸ふくろ共あかい

こみつ、出れば紅のく興さめ二三間あどへしざりまが三甫右工門刀に手をかけやあら心得ずやわづか成ほこれらの内より立出るは大の男そのうへ寶物をこわさにかいこしは何やつ成すといへ共何とやらん小氣味あしくれづ、ながら見あぐればふ、見しらぬいこどわりさくら山三位殿の乳兄弟澤村法眼とはわが事とにらまひす眼のひかりひらめいたるに廣右工門龍右工門こわくその法眼が何とてこへは出しぞ其寶物わたすまひか異鏡におよぶどのがさぬとそりうつをわさわらひ汝等が太刀ささにかしる物にあらざるや三甫右工門がせがれ大五郎惡事あらはれさくら山殿の家老神原海老藏にころされ汝等が日頃のたくみは湯を日かしたる水のさつて此世にかへらぬ澤村法眼赤坂五郎四郎が後家のしは木はわがむすめ成が義理によつて相はてしそのみざりまでも何とぞ若殿十三郎殿とさくら山殿のそく女花づを姫をめあせつ、がなく大松の家をさうぞくさせんとおもふにつけても大五郎がさいこの白狀によつて此寶物の事心もとなやさづかはしやと思ふ一念此土にとどまつてこ、にきたり邪佛丸あつきそふたりといふ聲物すさまじくよるべきやうはなかりけり

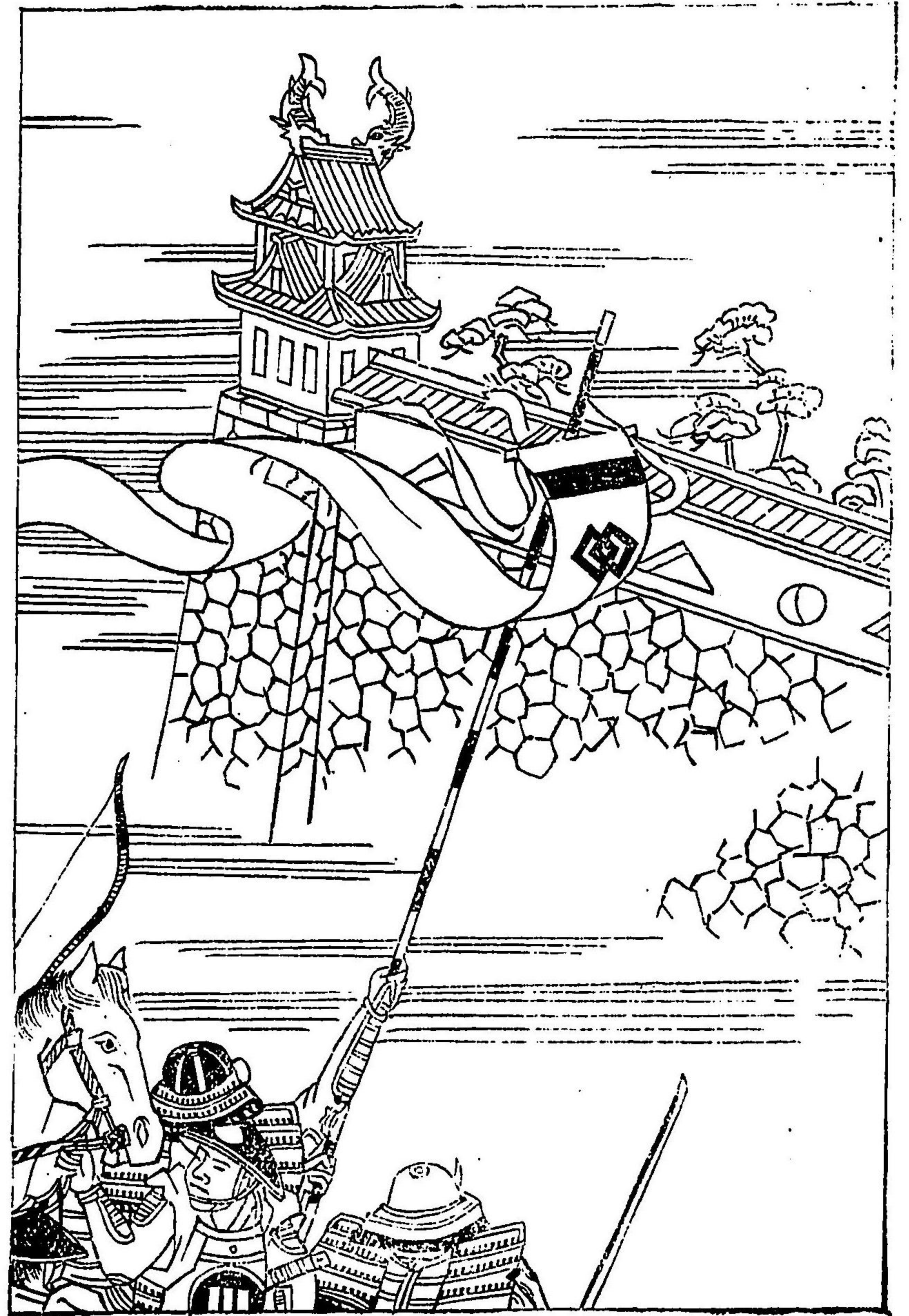
魂は去魄はどいまるとの古語たゞ其辭積の靈ひすんでさらざるのみ一端物にあつて伏する時は化ずる事氷の水に歸するがごとしとなんいそぎたてこ、ばかりねのくさまくら奥に花あるみよし野の山と化城喻品の心をよみし歌にて怨念深き靈を成佛させしためしもあり然るも三浦右衛門をはじめ皆々たそろしながら太刀に手をかけひさぶなを相寺になつてしやさばるにより法眼が靈は是に激していよ／＼さかたち寶物をかいてみ奥へとびこむと見へてその、ちかたちはなければども家鳴ねびただしく家をた、さくつすかどあやしく三浦右衛門もはつともてあぐみ近國に聞へある松島あじやりをたのみ祈禱させんとまねければあじやりを中につりあげ二三度ふりまはすゆへ松島も殊數をわかれてにびかへりぬさらば小倉山百庵といふ醫者の方に家鳴難除之札といふ物をもちつたへられしときこれよび借にかはしければ百庵先祖代々のたからなれば人づてには進じがたしと拾徳あらためるの札を臺にのせてさし上來りそも／＼御札と申すはもろこと種道大臣の自筆にてわが朝にふたつになき御札なり是を成亥へさしたる桃の木枝にはさみ大黒柱にさしそき種道大臣い世界の邪鬼をも手まりにつめてあそばされし故實をもつてわかさ娘をわつめ此御札の前にて手まりうたをうたひ手まりをつかせ申せばいか成邪氣もあの手まりのやうにつかれていた

まらぬとその家をにびさるゆへ家鳴は忽しづまる事うたがひなしつるにいたして見た事いごさらねきも申つたへに偽りとなしと底にてせんごさせ桃の枝をさらせ是にはさみ大黒柱にさしそきさてれ出入のまい子を急によびにつかはし手まりに目鼻をつけ鬼の顔にしてさみせんにあはせハアい／＼／＼はやり小うたのねに手まりと百庵がうたひ出すと震動ます／＼つよくなり中にこゑあつて大だけめら家鳴難除と書ては家鳴よけがたきの札とよむにあらずやと高わらひするに百庵すねもこしも立すふるひ／＼ひぬふみよいつむにならんやなりしづまり給へといふ所をくひすぢたれつかむともなく五六へんさんた打せて引くりかへせば百庵たまらじとそれ／＼にびじたくに成てひぬふみよいつ迄も勝手次第にやなりあそばせといづれも力によばずいかゞはせんと思ふ所へ手下の百姓も諸國修行の山伏殿夜前傍當地へまいり今日は逗留明日是より筑前の方へ下らるゝとの籠屋敷の家鳴を聞何ぞぞいのりどめて手がらにいたし度と望れ夫ゆへうかゞひ奉るといへばそれこそ幸なれ早／＼是へといふ間程なく人相人にすぐれせいのみ高からねきも俗にいふ臆ある男つゝ太刀とさばさみ立闘を上りさまに四方をひとにらみきつとにらみて座敷へどをり取よそ物の怪とすすに及ばず天地の間の事のり得ぬといふ例なしめてその物の怪はいか

成事とたづぬるにさむむら法眼といふもの、靈あらはれたからさうばひそのうへに家なり
をいたさせめいわくのよしをいふにぞくだんの山伏心にうなづきいら高珠敷れしもんでた
どへいか成死靈なりとも此やまふまをわすれとせまうといのりけるにふじぎや家なりひつ
しとしまり播磨灘で難風にあひ五日も六日も大風やますながれ次第に船のよるべなくあの
岩この岩にあたらんかと船中さもをなたねにして半分は飯の餌食と覺悟せしに俄に風しづ
まりむかふに見ゆるこそ文字が關と船頭船だまへ神酒あげてよろこぶ時の乗あひの心とれ
なじく扱も名人大のれ山ふし様と上座へうやまひなをし様と馳走してこのうへ何とぞ
寶物をとりかへす様に御さそうねがひ奉るといへばさづかひなさるるな此祈禱には愚僧一
人にてのまいらず寶螺を吹せ旅宿邊にのこせし下山伏共をよびよせだんをかざりいのり申
さねば成就いたしがたしまかしなからた々今の祈りにことの外くたびれ申たところくとや
すみそのうち祈つて進せう大舟に乗た様にれもふてござれといふを方に此うへはわか殿七
三郎殿をも此山伏のいのりころさせ悴なく成たりとも吾家國をれさえんと三浦右衛門又
惡心をまごりける

◎はやり小歌の曲は曲者退治

丘をもちふる小奇正のふたつわり正を見て正とし奇を見て奇とるはまことの奇正を知る
人にあらずといふ論唐の李衛公と太宗皇帝の門對につまびらかめて軍いた々その不
つみはしかず吳子秦軍の多勢を討て速なる勝をとりしもひとへに士卒をつかふ事よきに
よれりこ、に大松家の嫡男七三郎殿大切の寶物の儀なればとて直馬をむけられ桑名九
郎うしろ見としてその勢五百よき既に本國高遠の浦へつき給へども浦八百姓にかたく口
めし人は枚をふくみ馬は舌をまき城下へ入こみ給ふ事さらにしるものまれ成やうに
らひ給ひ三浦右衛門が屏敷にむかつてとさをとつとろあけさせける三浦右衛門方にも本
思ひまうけたる事とはいひながら家鳴のさとぎに取こみとかくしく用もせざるゆへ大
きにうろたへどかく奇妙成山伏殿なればあなたを術をねつちらたかの九字護身など云事
るまじき物にてもなければ折入てたのみて見とやとて三浦右衛門山伏の休まれし一間へ行
御聞なさるし通思ひがけなき大敵をうけたり御祈禱すぢにて味方勝利に成儀もござらと偏
に頼と奉る此御恩生々世々思れ申まじきと涙をながして申ければ山ふしれさあがり天我法
祖は役の行者にして降魔の利劍われにあり九字をきつてはらひかけなばたどはし敵は淡雲
へ熱湯をかくるがごとくさへはろびなんまかし軍始りたる最中に行とされば其驗なし氣遣



なく軍をこじめられよとの一言を鎖の楯と嬉しく寄合勢をかり催し此方よりも鯨の波をわはせぬはかに甲冑をなげかけ弓矢脇ばさみ三浦右工門廣右工門龍左工門矢倉にすしめばかねて一味連判の悪黨共こゝをしりぞきてとせんかたつくべしとふしこたへて防ぎけるゆへ中々急にれちぬべしとも見へざりけるよせ手の大將大松七三郎春興陣頭にをくみていかに三浦右工門家の寶をかくしむほんの企かくれなく怪大五郎白旗の上は早々腹切て寶一を此方へ渡すべしと馬らかによばり給へは三浦右工門矢倉よりさしのぞきて家の重寶はどか手に入といへ共今日子細あつて行方しれず然共此家内には離るべからざればふしぎの驗術を以て追付手にいれその方總目の參内の妨べしと見へしが澤村法眼の姿まばらまの様にあらはれ大松家の重寶邪佛丸の一こし敵の手に在て手詰になり最早方に及ずといふ場はいたり敵これを火にくべ石にたしかば御望も空しくならんといふこの一念爰に來つてやすくとうばひ取て若殿の御手へ渡さ申迄と花づま姫と中よく家國を治め給ふべしと邪佛丸の釘を口たまかさけす機にうせにけり味方是に以さまをなし是までの寶物の心わりま故つよくせめざりまがもはや心にかくる事はなしと短兵急にもみつぶさんとぞ責よせたり三浦右衛門廣右衛門矢倉より是を見て興をさまし是山ふしどのわれを敵へとられてと折角軍いたして勝てからが二汁七菜を煮たき仕たてし膳を以だす段に飯をわすれてたかなんだといふやうな物で埒のあかねせんさくさいせんよりそれゆへに貴僧をもたのみしにあらすやとちどらら三口あいはば山ふしひびをなで、ちつ共氣つかひめさるゝな敵をだに一のりに祈りふする時之寶物は自然と手に入る道理もはや刻限もよし手下の山伏共をよび入ていのり中さん間山伏すがたの者どもい木戸をひらき通されよ貝れ一取て高らかにふきたつる内龍左衛門直にから免手の大木戸へ出て待請るに四日市勘太郎が若たう坂の下新五郎十三郎を先にたて究竟の若者五六十人山伏出立にてとやくとこも入れども異形の出立にそれとも見分先達の山伏に一禮れば先達の山伏壇をかまへ三浦右工門をよりに立て祈んどもちのづき取てをさゆるをこといかにと廣右工門龍左工門が立かゝるを新五郎十三郎一々に組ふせ中にも先達の山伏兜巾つけ髪をかなぐり捨れば本より髭もかつらへ仕付たる物ゆへ中びんの男ど成我を誰どか思ふ櫻山三位殿の家老神原海老藏見しらぬを幸にさまをかへて入こんだりとちつともうごかさぬに一味の悪徒等あされはてしもはやかなはじと降参すれば表よりは七三郎殿平一郎を先にたてしより人悪八殘らず首打れとし勝をさきとどあげ急ぎ此よし父左京大夫殿へ申上て總目の參内せんといづれも悦び勇み都へ歸らせのふ

なく軍をこじめられよとの一言を鎖の楯と嬉しく寄合勢をかり催し此方よりも鯨の波をわはせぬはかに甲冑をなげかけ弓矢脇ばさみ三浦右工門廣右工門龍左工門矢倉にすしめばかねて一味連判の悪黨共こゝをしりぞきてとせんかたつくべしとふしこたへて防ぎけるゆへ中々急にれちぬべしとも見へざりけるよせ手の大將大松七三郎春興陣頭にをくみていかに三浦右工門家の寶をかくしむほんの企かくれなく怪大五郎白旗の上は早々腹切て寶一を此方へ渡すべしと馬らかによばり給へは三浦右工門矢倉よりさしのぞきて家の重寶はどか手に入といへ共今日子細あつて行方しれず然共此家内には離るべからざればふしぎの驗術を以て追付手にいれその方總目の參内の妨べしと見へしが澤村法眼の姿まばらまの様にあらはれ大松家の重寶邪佛丸の一こし敵の手に在て手詰になり最早方に及ずといふ場はいたり敵これを火にくべ石にたしかば御望も空しくならんといふこの一念爰に來つてやすくとうばひ取て若殿の御手へ渡さ申迄と花づま姫と中よく家國を治め給ふべしと邪佛丸の釘を口たまかさけす機にうせにけり味方是に以さまをなし是までの寶物の心わりま故つよくせめざりまがもはや心にかくる事はなしと短兵急にもみつぶさんとぞ責よせたり三浦右衛門廣右衛門矢倉より是を見て興をさまし是山ふしどのわれを敵へとられてと折角軍いたして勝てからが二汁七菜を煮たき仕たてし膳を以だす段に飯をわすれてたかなんだといふやうな物で埒のあかねせんさくさいせんよりそれゆへに貴僧をもたのみしにあらすやとちどらら三口あいはば山ふしひびをなで、ちつ共氣つかひめさるゝな敵をだに一のりに祈りふする時之寶物は自然と手に入る道理もはや刻限もよし手下の山伏共をよび入ていのり中さん間山伏すがたの者どもい木戸をひらき通されよ貝れ一取て高らかにふきたつる内龍左衛門直にから免手の大木戸へ出て待請るに四日市勘太郎が若たう坂の下新五郎十三郎を先にたて究竟の若者五六十人山伏出立にてとやくとこも入れども異形の出立にそれとも見分先達の山伏に一禮れば先達の山伏壇をかまへ三浦右工門をよりに立て祈んどもちのづき取てをさゆるをこといかにと廣右工門龍左工門が立かゝるを新五郎十三郎一々に組ふせ中にも先達の山伏兜巾つけ髪をかなぐり捨れば本より髭もかつらへ仕付たる物ゆへ中びんの男ど成我を誰どか思ふ櫻山三位殿の家老神原海老藏見しらぬを幸にさまをかへて入こんだりとちつともうごかさぬに一味の悪徒等あされはてしもはやかなはじと降参すれば表よりは七三郎殿平一郎を先にたてしより人悪八殘らず首打れとし勝をさきとどあげ急ぎ此よし父左京大夫殿へ申上て總目の參内せんといづれも悦び勇み都へ歸らせのふ

れば大殿喜悅なしめならず櫻山殿もさつそくに御入來花づま煙のたこしを人れ瀬川も召つ
 れ給ひて中よくいじひの 盃事はこの當家の重寶と邪佛丸を七三郎殿ふくろより取出し箱
 ふやいなや虚空に火の玉くるめさきたり大五郎がすがたあらはれいで一念をかけし寶物ど
 らでやわか置べきかどちかづく所に名劍のしるしとして此劍をのれどぬけいで車輪のごとく
 くるく廻り大五郎が靈を切はらへばあらたへがたや苦しやな再び隙をなすべからずと力
 も弱り形も衰へ消ゆく跡に之本の鞘へたさまる劍をたしいただき法眼勘太郎跡と千部經に
 て吊べしと上下さしめき櫻山殿執成にて繼目の參内すみの江高砂のもろしらが御夫婦し
 つはりそれくに加増をくだされ大殿法林七三郎殿繁昌の家國おさむるご、んざの聲賑
 に末々まで樂まむ春こそ目出たけれ

歳徳五葉松卷之五大尾

寶曆三年酉正月吉日

名著集自第一卷至二十四卷目次

●第一卷	後營月氷奇縁	完	曲亭馬琴著
	小春治兵衛花廻島蟲	完	松亭金水著
●第二卷	碗久松山柳巷話説	完	曲亭馬琴著
	大津土産吃又平名畫助刀完	完	式亭三馬著
	邂逅物語	完	天歩子著
	湘中八雄傳	完	北壺游著
●第三卷	吾妻餘五郎雙蝶記	完	山東京傳著
	淺間ヶ嶽面影草紙	完	柳亭種彦著
●第四卷	淺間ヶ嶽后編逢州執着譚完	完	柳亭種彦著
	怪談雨夜の鐘	完	十返舎一九著
	霧替替文章	完	栗杖亭鬼附著
●第五卷	艶廓通覽	完	洞羅山人著
	貞操美談園の花	完	爲永春水著
●第六卷	恩愛二葉草	完	鼻山人著
●第七卷	小夜の中山石官遺響	完	曲亭馬琴著
●第八卷	飛彈匠物語	完	六樹園著
	邯鄲諸國物語 近江の卷	完	柳亭種彦著
	五色の糸屑	完	峨眉山人著
●第九卷	三十三間堂 柳の糸	完	小枝繁著
	棟材奇傳	完	藤月亭有人著
●第十卷	花曆封じ文	完	曲亭馬琴著
	新果解 脫物語	完	ちぬ平魚著
●第十一卷	於三幕平宗像曆	完	柳亭種彦著
	邯鄲諸國物語大和卷	完	井原西鶴著
	胸算用(大晦日ハ一日千金)完	完	柳亭種彦著
●第十二卷	昔語稻妻表紙	完	山東京傳著
	姫萬兩長者廻鉢木	完	曲亭馬琴著
	糸櫻春蝶奇縁	完	曲亭馬琴著

●第十三卷	邯鄲諸國物語播磨卷	完	柳亭種彦著
	紀錄曾我女黑舟	完	江島屋其碩著
●第十四卷	塞廼復讐戀の宇喜身	完	八文字屋日笑著
	玉 箒 子	完	松亭金水著
●第十五卷	邯鄲諸國物語伊勢の卷	完	義 端
	邯鄲諸國物語遠江の卷	完	笠亭仙果著
	怪談 登 志 男	完	笠亭仙果著
●第十六卷	佐野常世物語	完	戀雪舍素及子著
	小説浮牡丹全傳	完	曲亭馬琴著
	痴漢三人傳	完	山東京傳著
●第十七卷	俊徳麻呂諸曲演義	完	威和亭鬼武著
	繪本運理の片袖	完	振鷺亭著
●第十八卷		完	十返舎一九著

但シ壹冊定價金五錢全部廿四冊代價金壹圓但シ壹冊ニ付郵税金貳錢

發行所

礫川出版會社

	候手摺昔木偶	完	柳亭種彦著
	異國奇談和莊兵衛	完	遊谷子著
●第十九卷	常夏双紙	完	曲亭馬琴著
	櫻姫曙双紙	完	山東京傳著
●第二十卷	忠臣水滸傳	完	山東京傳著
●第二十一卷	大晦日曙草紙	完	山東京傳著
	化鏡丑滿の鐘	完	曲亭馬琴著
●第二十二卷	已 惚 鏡	完	式亭三馬著
	三七全傳楠柯夢	完	曲亭馬琴著
●第二十三卷	孝子嫩物語	完	高井關山著
	春色淀の曙	完	松亭金水著
●第二十四卷	菊の井草紙	完	爲永春水著
	會稽松の雪	完	峨洋堂著

溫古小説發行目次

高砂大島臺	其碩著	正價金五錢
世間手代氣質	其碩著	正價金五錢
歲徳五葉松	其碩著	正價金五錢
女非人綴錦	其笑著	正價金五錢
武道近江八景	其碩著	正價金五錢
出世搦虎昔物語	其笑著	正價金五錢
那智御山手管瀧	其笑著	正價金五錢

珍術器粟散國 其風著 正價金五錢

元祿太平記	梅園堂著	正價金五錢
咲分五人媳	其碩著	正價金五錢
熊谷女編笠	錦文濟著	正價金五錢
風流菊水卷	其樂齋著	正價金五錢
俄仙人戯言日記	閑鶴齋著	正價金五錢
彩色歌相撲	其笑著	正價金五錢

明治二十五年三月五日印刷出版

編輯者 故其碩、瑞笑、

翻刻兼 足立庚吉

發行所 東京市小石川區指ヶ谷町十七番地

印刷者 小林由造

東京市小石川區掃除町三十三番地

發行所 小石川區掃除町三十三番地 礫川出版會社

關西販賣所 大坂市心齋橋北詰 競爭屋本店

大販賣所

日本橋區本石町二丁目 上田屋本店 京橋區尾張町 東海道雜誌店

神田區裏神保町 上田屋支店 日本橋區小網町 信文堂雜誌店

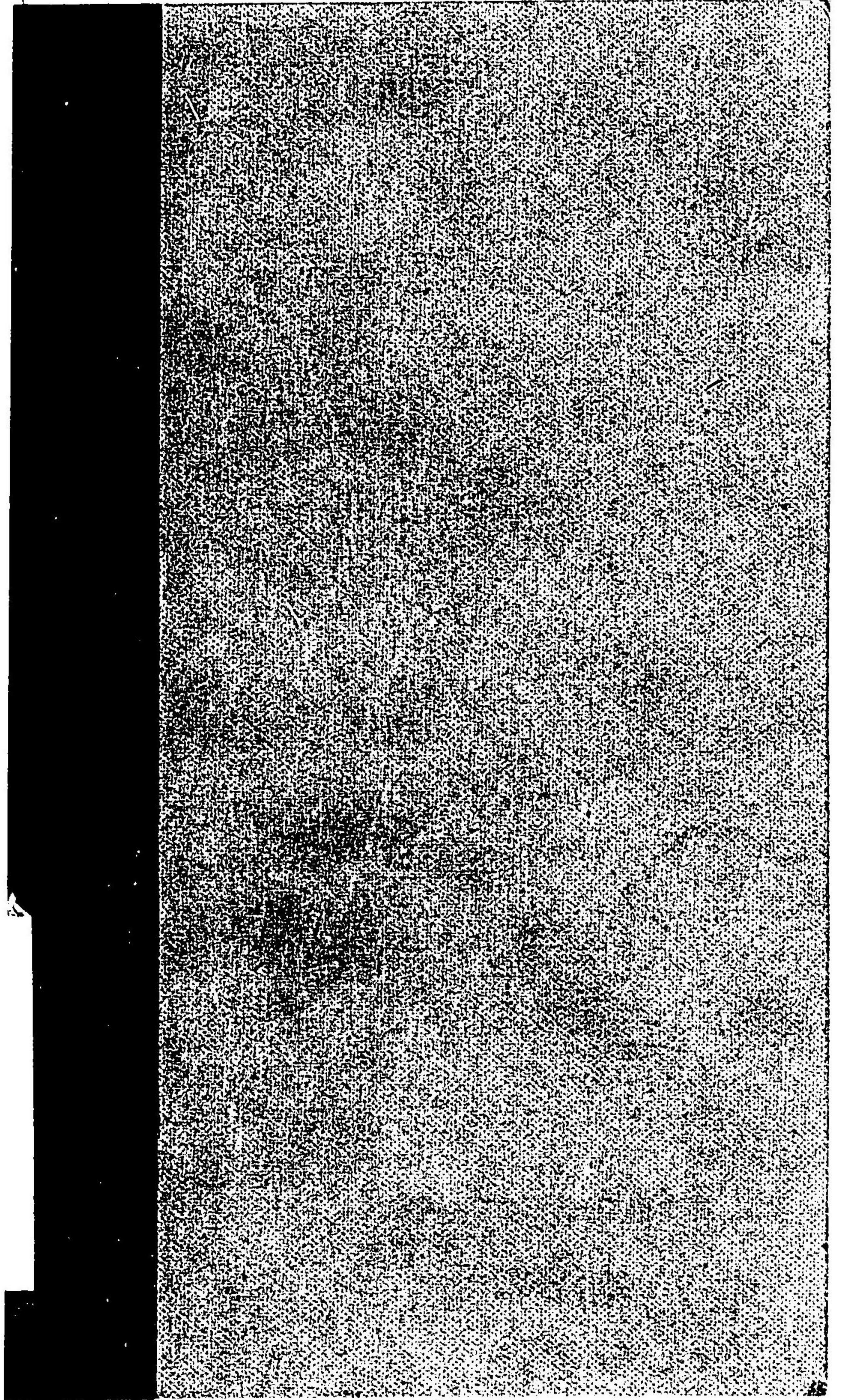
淺草區三好町 大川屋書店 京橋區彌左衛門町 綴々堂雜誌店

日本橋區通四丁目 金櫻堂書店 日本橋區鏡砲町 指金堂雜誌店

神田區錦町一丁目 武藏屋書店 神田區錦町三丁目三番地 井上藤吉

本郷區元富士町 解明堂

右之外日本全國各書林雜誌店ニ於テ取次販賣仕候



913.52

E98t2

089563-000-2

913.52-E98t2

歲德五葉松

江島 其碩

八文字 瑞笑 / 著

M25

DBM-1487

